

小田原史談

第 174 号

発行所 小田原史談会
小田原市栄町 2-13-20
アオキ画廊内 TEL(24)0636

昭和三十年頃の荻窪(小田原市)の風景

この空中写真は、(株)報徳が所蔵するもので、昭和三十年(一九五五)頃撮っている。

時代は、「もはや戦後ではない」と昭和三十一年度の『経済白書』が記すように、アメリカ軍の特需依存から既に脱却して、安定成長に乗ったところである。

それでも、写真のような田園風景は、まだ多く残っていた。

(株)報徳の沿革をみると、先々代の社長井上嘉七氏(一八二二-一九〇九)は、報徳精神を家訓に取り入れ、大正四年(一九一五)には店とは別に井上製綿所を設立、次いで大正八年、小田原報徳二宮神社から「報徳」の称号の使用許可第一号をえて、合名会社報徳綿井上製綿所と商号を変更、大正十五年には報徳製綿(株)に組織替えをしている。

昭和四年(一九二九)には、脱脂綿の製造・販売を開始し、戦時中は火柴原質の製造にもあたった。

工場の煙突の斜め上の講堂は、当時としては斬新な構造であった。

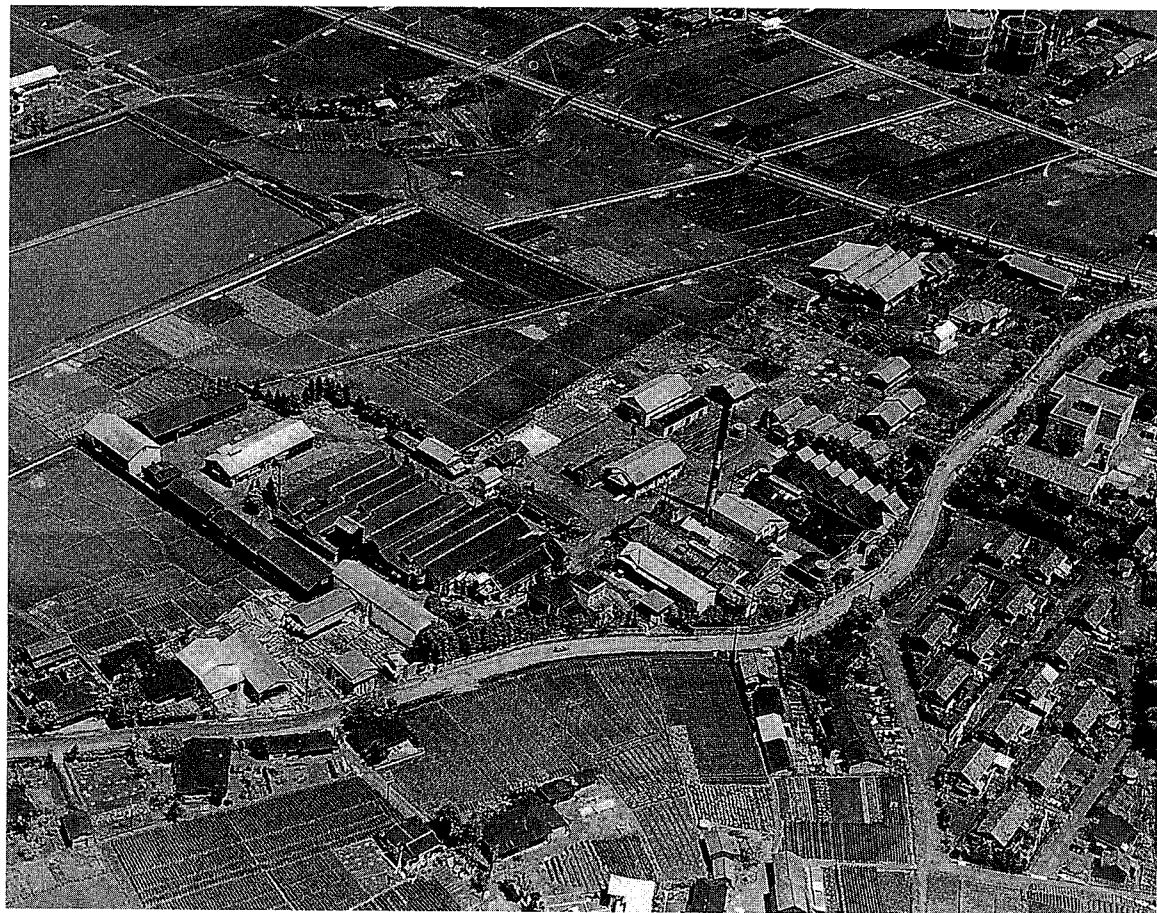
左手の黒い屋根の建物は、昔からの倉庫でいままも使用されている。

工場前の道路のカーブは今も変わらない。傍らを流れる荻窪用水が、溝蓋で覆われ歩道となっていて当時と変わっている。

左側上部の池は、鰻の養殖所で、今では小田原市役所と中央公民館が建っている。

右手の四角の建物は、足柄電話中継所(荻窪二番地)である。昭和の初め頃に建てられたと思うが、当時、洋風の建物は珍しく、よく小学生の写生の対象となった。いまでは、N T T・T E 小田原サービスセンターと云う名称であるが、かつては関東電気通信部東京搬送通信部の管轄下にあったこともある。

右上部は、池上(現・小田原市扇町二丁目)で小田原瓦斯(株)のガスタンクが二基並んでいる。また、ガスは石炭を蒸留していた時代で、エネルギー源が、石油やさらに天然ガスに変わり、装置が球形ガスホルダーとなるには、まだ、歳月を必要として



いた。(陶生)

高田喜久三さんを悼む

岡部 忠 夫

高田さん、貴方が永の眠りに就かれたのは、六月十二日の午後十一時二十二分と聞いております。恰も引き潮の時刻に合わせる如く生涯の幕を閉じられたのですね。享年八十七歳、長寿の仲間に入りますが、しかし、私にとつては心にぽっかり空いた虚ろな感じを禁じえません。これからは二度と、お会いして興味深い話をいろいろとお聞きすることも出来ません。また、小田原史談会の機関紙『小田原史談』に連載の「材木屋綺談」の軽妙な文章に接することも出来ません。残念の一言です。寂しい限りです。

高田さん貴方が小田原史談会の会長になられましたのは、平成二年(一九五〇)から平成六年(一九五四)の五年間でしたね。その間、会の将来の事業のための積立金制度の創設、会長交代の度に移動する事務所の恒久化に努力され、特に機関紙『小田原史談』については、適

切なご指導・ご助言を頂き深く感謝いたしております。会の運営で一番重視されましたのは、『小田原史談』の内容は、なにも小田原に範囲を絞る必要はないではないか、また、歴史に限定しなくても良いのではないか」という高田さん、貴方のご意見に、私は大いに意を強う致したことがありました。

平成五年のことでしたか、高田さん、貴方は一時体調を崩されたことがありましたね。それから、「原稿が出来たよ」と電話連絡を受けるようになりました。特に期日を指定していません、頃合を見計らつては連絡があり、また、特別にお願いしなくても「カットを描いた、使ってくれよ」と、渡される事がしばしばあり『小田原史談』を編集するのにとても都合でした。さる五月の始めでした。高田さんが地元の新聞に連

多彩な文化活動に活躍

高田 掬 泉

たかた きたせ



高田 掬 泉

〔晩学です〕という高田掬泉(本名「高田喜久三」が「文筆世界の楽しみに溺れる」ようになったのは、元安(昭和51)年の64歳、稼業の材木屋を廃業してからのことである。しかし、その素地は若き日既に培われていて、元豊(昭和8)年の21歳のとき、友の勧めで尾崎凡九郎の「さへづり」に

投稿している。句歴は長い。「益」(昭和15)年、斎藤香村の「こよろぎ」グループに参加。「丸」(昭和24)年、香村を主宰とする句誌「春夏秋冬」の創刊に杉山夢洋、府川葵水らと共に参画。「元豊」(昭和28)年、庶刊と共に十年間は句作を絶つたが、元豆(昭和50)年には、「春夏秋冬」時代の同人を語らつて「こよろぎ」誌を発行している。また、この間、俳画を独習、温かくて親しみのある絵を描く。

「こよろぎ」誌を発行して十年間は句作を絶つたが、元豆(昭和50)年には、「春夏秋冬」時代の同人を語らつて「こよろぎ」誌を発行している。また、この間、俳画を独習、温かくて親しみのある絵を描く。

しかし、俳句だけの世界に留まらず、俳句で洗練された語句と端々しい感覚と豊かな構成力でもって、随筆、紀行文、創作をものにしていく。その主な著作を挙げると、「俳句の世界」(名もなき詩人)、「材木屋今昔」(北村透谷物語)、「吾がうぶすなの魂」(巷説箱根戦争始末)、「明治小田原太平記」など。

(岡部忠夫)

載された「大正小田原万華鏡」が、一冊の本となり秦野の夢工房で発売されました。このことを伝えた新聞をコピーして高田さんが入院中の小沢病院にお届けしたことがあります。看護されている奥様が、その記事をどうぞ読みあげて下さいと云われ枕元で読み上げました。すると高田さんは、満足げな表情をされたのが眼に浮かびます。

高田さんが今まで自費出版された本は幾つかありますが、正式に市販されるのは、この「大正小田原万華鏡」が最初の最後です。それにしてもとまかく、「大正小田原万華鏡」は素晴らしい。また、それに添えられた詩情豊かな自作の俳画が、洗練された文を引き立てています。「俳人高田掬泉」の面目躍如たるものがあります。

ところが、高田さん、貴方は病床で「一銭にもならないことをし続けてきた」と一言洩らされました。しかし、高田さん、貴方の魂は、「大正小田原万華鏡」やその他に遺された私

の魂は永遠です。どうか安らかにお休みください。平成十年六月十五日

高田喜久三氏が去る六月十二日亡くなられたが、折から『小田原史談』を編集中であったので、急遽原稿の差し替えを行い、時間的な余裕がなかったので告別式のおりの岡部忠夫、向山重忠両氏の弔辞を掲載。また、「弔辞」の替わりにタイトルをつけた。

わが生涯の師

高田喜久三氏に捧ぐ

向山 重忠

この世に生あるもの、いつか必ず滅すとは申せ、入院されて三か月の長い間、奥様・御家族の手厚い看護の甲斐なく、十二日午後十一時二十二分この世を去られたとの報せに接し、覚悟はして居たと申せ、体の力が抜けて行く気持ちでした、慕い、尊敬してきた私に、こんなつらい悲しい事はありません。私が高田さんに親しく御指導を頂くようになったのは、六十一年私が

家族と共に

自治会長を命ぜられ初めて自治会長会議に出席した時からです。当時高田さんは、自治会総連合副会長、小田原市社会福祉協議会副会長として万年地区の為いや小田原の為奔走されている時で、町のあちこちに立っている旧町名保存碑の建立や駅西側にある北條早雲の銅像の建設や市で配付された自治会だよりの編集など多方面に仕事を成し遂げて参られました。

明治四十四年の生まれと伺います。年齢に思われぬ新しい考えをお持ちで万年の社会福祉の活躍を報ずる「しおさい」を創刊、ご自分でもカメラを持ち取材され発行されました。温厚で誠実な人柄ゆえ会員に尊敬、親しまれ地区で仕事の有るときは、高田さんを中心に皆が楽しく力を合わせ、行動

しました、万年七地区の会員のより以上の親睦と健康の為久しく中止されていた体育祭を再開し大いに血を湧かした事も懐かしい事でした。

年四回ある独居老人昼食会も、高田さんの博識で素晴らしい記憶から生まれるお話から始まる事が恒例になり、お話を聞くことが楽しく成りました。教育にも大変に熱心で御自分が学ばれた学校、今の城東高校の初代のPTA会長を長い間勤められ、次代を背負う若い人に期待して居られたと思います。

平成五年、健康を害され入院されたおり、いろいろのお役を退かれ退院後、お好きであったでしょう文筆生活に入れられ、後の世の為に書かれて居られました。古き小田原をよく知る高田さんを失うことは、小田原の財産を失った事。何時お伺いしても机の前でペンを持つておられ、まだまだ書きたいことは沢山有ったでしょう。

自治会長会議の帰り史談会のお話を伺い、「お前も会員にどうか」とお誘いを頂き、喜んで加入させて頂き、



小田原に居て小田原を知らぬ私、大変ご指導頂きました。私には高田さんは永遠に師で有り会長でありませぬ。教えて頂いた事を次に伝えてゆく事が、私に与えられたことと感じます。唯一つの心残りは一昨年

【故人略歴】

明治四十四年(一九二二)五月三十日小田原町万年四一五七六(旧唐人町、現小田原市浜町三十一一四二)に生まれる。

昭和六年(一九三三)小田原商業学校を卒業。父経営の木材商を継ぐ。

昭和十九年(一九四四)一月 応召。

昭和二十一年(一九四六)四月 北支から復員。

昭和五十一年(一九七七)

木材商を廃業。 昭和五十五年(一九六〇) 『名もなき詩人』を刊行。 昭和六十三年(一九六八) 『吾がうぶすなの譜』を刊行。 平成二年(一九九〇) 小田原史談会会長に就任。 平成六年(一九九四) 小田原史談会会長を辞任。 平成十年(一九九八) 五月 『天正小田原万華鏡』を刊行。 平成十年(一九九八) 六月十二日死去。享年八十七歳。

小田原叢談

(三十三)

石井富之助

氏康柱

『徳川実記』という本がある。江戸時代の歴史を研究するものは、誰でも一度はこの本の御厄介になるほどのものである。

その第一巻の「東照宮御実記録」巻六にこの話が載っている。

小田原の城に氏康柱と云うのがある。そのむかし北条氏康のときに、荒川ながしといふ者が叛逆を企てたといふことで、氏康は家臣一同の見ている所でこれを手討ちにした。その時、太刀の鋒先が書院の柱に切りこんだのを、後々でも大切にし、蓋をかけておいて、見せていたのだといふと願うものがあるといふと見せた。これは後に叛逆の心を持つ者のいましめとして残し

て置いたものである。当家となつて小田原を大久保七郎右衛門忠世にたまたわつたが、忠世の子忠隣ななみの代に、君(家康)が御上京のおり小田原におとまりになつた。その時忠隣を召して、かの柱を供の者共に見せてやつてくれと上意があつた。忠隣は、その柱の立つていた書院は大変に荒廢し、柱の根も朽ちはててしまつたので、近頃立て直した時に柱も取りすててしまいました。ただし、むかしから玄關にかけてまいりました鈴木大学の弓といふものはただ今もそのところに置いてありますと申し上げた。家康はこれを聞かれ、北条家は早雲氏綱の代には豆

相兩國を領したが、氏康にいたつて次第に國をうちひろげて、ついに關東八か國を全部領することとなつた。その上氏康がまだ若年の頃、武州川越の夜軍にわずか八千の兵で、上杉の八万三千の大敵を切りくずし、武名を天下にかがやかしたと、近き世にはめづらしい英傑である。その名のついでに柱なのだから、たといくちても根つぎをして残して置けば、末々までこれを見る人々の武道のいさおにもなるであらうに、なぜ理由もなく取りすててしまつたのか、まことに心なきふるまいである。大学の弓などは折つて捨ててもよいものよと言われたので、忠隣は大いに恐れいつて、総身に汗して退いたといふことである。(岩淵夜話)

忠隣といふ人は、大久保家代々の藩主のうちで忠眞あやまとならんで名君とうたわれた人であるが、天下をとつた家康とではてんで角力に

ならない。ちなみに鈴木大学については「北条五代記」に次のような記事がある。

氏直の旗本の弓大将に鈴木大学頭成脩といふ者がいて、大矢束を引いて上手の名を得ていた。幾度の合戦に先きがけをして譽をあらわしたからか、白地の指物に「やり」といふ二字を書いた。人はこれを見て、鈴木大学頭大旗本の弓大将で、その上關八州に比類のない射手である。だから弓と書くのなら別段不思議はないが、槍と書くのはぶしつけであると評したが、面と向つてとがめる者はなかつた。太田十郎の家中、武藏國岩村の住人に春日左衛門佐といふ者がいたが、大学に向つて「その方の槍は旗本の槍か關東の槍か」とたずねた。大学が「旗本の槍だ」と答えると、「それならよろしい。いやしくもこの春日左衛門がにいるのに關東の槍と名付ける者がある

はずがない」と荒言をはいた。人々はこれ聞いて、大学は春日左衛門にとがめられて、關東の槍と答えられなかつた。これからは大学の槍は鉛矛と名付けたらよいと非難したが、小田原籠城の時、大学は洩取口の役所にあつて、毎日矢倉にのぼり、敵を目下に見て、鈴木大学頭と矢印をつけて放つ矢に、あだ矢は一つもなかつた。人々のいうには、大将といふ者は万人に勝つといふことが肝要である。敵の鉄砲がならんでいる前へ出るのは、火取虫が火に飛び込むようなものだといさめたが、大学はそれを聞かず、敵は大学を討とうと心掛けていたので、ついに鉄砲にあつて討死した。

いくら剛勇無双の侍であつても、これではまったくお話しにならない。氏康と大学、家康と忠隣、この組合わせははじめから器量がちがうのだからしょうがないが、それにしても

忠隣が、こんな男の弓を玄
関にかざっておいて、氏康
柱の方は捨ててしまったの
だから、家康に叱られたの

小田原最初の新民謡

日本全国に古くから伝
わっている民謡に対して、
新しい民謡運動が起ったの
は大正八年(一九一九)のこと
だといわれる。古茂田信男
外三名著『日本流行歌史』
によれば

このころに出版された
北原白秋のパンフレッ
トにも「小唄集」との
み書かれていて、まだ
「民謡集」と銘打たれ
た詩集は出ていなかっ
た。大正十年に出版さ
れた野口雨情の代表的
な民謡集「別後」、翌十
一年に出版された雨情
門下の島田芳文の「郵
便船」が新民謡集と銘
打った最初のものだっ
た。

とある。

この新民謡運動は昭和に
入ると全国的にひろがり、
観光地のPRとして地方小
唄がさかんに作られるよう
になった。昭和二年(一九一七)
には野口雨情作詞、中山晋

は当り前だ。
忠隣は、どうやら文化財
の判定をあやまつたらしい。

平作曲の「須坂小唄」、北原
白秋作詞、町田嘉章作曲の
「茶っ切り節」、昭和三年に
は長田幹彦、中山晋平の「天
龍下れば」、白鳥省吾、中山
晋平の「龍峡小唄」などが
作られている。

当時の小田原町は関東大
震災で手ひどい打撃を受け
たにもかかわらず、それを
みごとに克服して発展の道
をたどっていた。小田原駅
は箱根登山、大雄山、小田
急の三私鉄をあわせて交通
の要点となり、観光客は逐
年増加していた。
このような状況の中で、
小田原でも一つ新民謡を作
ろうではないかという声が
でてくるのはむしろ当然の
ことだったといつてよいで
あろう。

小田原町が直接これにた
ずさわったのか、あるいは
小田原保勝会がやったの
か、その辺はさだかでない。
作られた年もはっきりして
いないが、わたしは昭和五

年(一九三〇)ごろだと思っ
ている。ともかく郷土の詩人
福田正夫の作詞、尺八演奏
家、作曲家として知られた
福田蘭童の作曲で「小田原
節」「足柄小唄」(鷗どり)と
いうのができあがった。こ
れが小田原最初の新民謡で
ある。

これは鈴木正一指揮のポ
リドル・オーケストラの
伴奏、ソプラノ歌手四家文
子の歌でレコードに吹きこ
まれた。

わたしはこのレコードを
長い間探し求めた。そして、
ついにそれを、しかも二枚
手に入れた。このレコード
は現在図書館に所蔵されて
いる。

この歌を知っている人は
ほとんどなく、歌詞のリー
フレットもない。そこでわ
たしはレコードをかけて聞
いてみた。

小田原節

一、よつて見やれ 帰られ

まいぞ

日もぬくむ 冬もあた

たか

小田原サテよいところ

コイコイコイヨ

二、聞いて見やれ うれし
かろうぞ

鐘の声 波にひびいて
小田原サテよいところ
コイコイコイヨ
三、住んで見やれ 人の心
も
やわからかに いつもの
んびり
小田原サテよいところ
コイコイコイヨ

というのである。ところが
「足柄小唄」の方は聞き
とりにくくてどうしても歌
詞がわからない。

そこで福田さんに問い合
わせたところ、古いことな
ので自分も忘れてしまっ
た。ことによると作曲して
くれた福田蘭童氏が知って
いるかも知れないから聞い
てみよう、という返事がき
た。

そして間もなく福田蘭童
氏から左のような手紙と歌
詞が送られてきた。

前略福田正夫氏より歌
詞が不明だからという
手紙を貰いました。別
紙の通り書きましたか
ら御送ります。幸に
昔の日記の中に書き込
んでありましたのです
が、レコードもなく節
もすっかり忘れてしま
いました。草々。

四、沖に見えるは ありや
大漁ぶね
鷗浮くだろ 水あ冷た
かろ
なんの小田原 陽だま
り身代
果報妬けるなら 来て
みやれ

一、足柄小唄 一名鷗どり
海に浮ぶは ありや鷗
どり
浮き世辛かる 水あ冷
たかろ
嬢やしよんぼり 可愛
いえくぼ
しおて吹こうと 泣
きゃしない
エッソレンソレンレ、ソ
レナ
二、箱根おろしは ありや
吹きこえる
南国ぬくかろ 陽は燃
えるだろ
町で暮らすにや 安心
ぐらし
恋の思案で 日が暮れ
る(以下同じ)
三、お城うらには ありや
梅林
花も笑うだろ 身もう
れしかろ
日がな一日 ひねもすあ
永い
町で暮せば 気も伸び
る
四、沖に見えるは ありや
大漁ぶね
鷗浮くだろ 水あ冷た
かろ
なんの小田原 陽だま
り身代
果報妬けるなら 来て
みやれ

(続)

藩札の研究

各藩で発行された紙幣の諸問題(1)

谷口得二

藩札の嚙矢

藩札とは江戸時代に大名領で各藩が貨幣の不足を補うために、その領内に限り通用の紙幣を発行したのが藩札である。実際には、財政困難のためが多かったもので、その変遷興亡には、いろいろの悲劇も発生し、その研究は経済史の上で重大な問題が含まれており、興味深いものがある。

その嚙矢は、寛文元年(一六六一)、越前、福井藩主、松平越前守光通(四十五万石、正保元年、延宝二年)が国用の不足に苦しみ、幕府が越前家に約した増封を履行しないのを口実とし、その許可を受けて藩札を発行したのに始まる。以後福井藩は種々の曲折があり、札に対する幕府の度重なる禁令の弾圧にも堪えて明治維新までに三年または五年ごとに新札を発行、旧札を切り捨て約四十回以上連続発行し

た。寛文より元禄期の古い札も種々現存しており、享保十五年以後の藩札類には有名な「松平家の藩札屏風」があり、それには各年代の見本札が完全に揃えて保存されており藩札研究の有力な資料となっている。

かの有名な「山田羽書」が、慶長頃を初めとして明治の「度会府」に引き継がれ、二百余年連続発行通用を見たのと共に我国、紙幣史上に基幹をなす双璧である。

(註) 明治元年(一八六八)発行の銀札で、一匁、五分、三分、二分の四種あり。伊勢の山田では昔から山田羽書という札を発行していたが、明治元年にそれまでの山田奉行に代わり度会府が設置され、新しい札を発行した。なお明治二年(一八六九)にも四匁預札と壹匁預札を発行し

た。このうちの四匁札は、明治天皇が明治二年三月に伊勢神宮行幸のおり、山田町民一戸ごとに白米一升と酒三合をそえて下されたものである。

福井寛文札は九十九橋詰駒屋宅を札所となし、荒木、駒屋の二人を元締とし、札所奉行以下必要の役人を置き、三国、金津、府中に札所分所を設け銀拾匁札を最高額として発行された。その一つの裏に楮金銘として、「楮金莫慢妙奇於神、一略、贖賊歌証楮金罰新」と贖造罰則を掲げ、額面を墨書、高額券を「大目札」、小額を「小目札」と記し、銀拾匁券なれば左右に「拾」の字の類を集めて額面の変改出来ぬように考案するなど、紙幣としての体裁をよく備えた立派な札である。しかし、これらの制度は漸次に完備されていったもので、藩札は封建時代の特殊紙幣で、勿論、金銀使用は停止法度であった。

藩札発生以前の私札

戦国末期より国内漸く統一にむかい、取引き、交通

が安全となり、一々現金で取引決済をする煩を避けるために、手形様のものとして、伊勢国山田神領に「山田羽書」が発行された。慶長年頃が最初で、神宮師職、伊勢商人によつて発行され、質物を入れ、組を作り連帯責任をとる迄に発達し、ついに近郊の射和、丹生、松阪迄伝播し、富豪による発行で信用があつた。また別に元和三年(一六二七)、大坂江戸堀河開削に「人足切手」があり銀札である。堺にも木地屋、筒井家の「夕雲開銀札」が元和八年(一六三三)頃があり、平野庄にも続いて銀札の流通を見た。大和には、南北朝の頃より吉野下市に手形が流通していた由で、後寛永五年(一六二八)の「吐田屋銀札」が現存している。この系統の札は幕許を受けた御免銀札として発達したものである。さらに寛永十一年(一六三四)発行の「今井町銀札」がある。この外、河内、摂津方面にいろいろ続いて発行されているが、いずれも私札である。当時の札はみな大型で、表裏に漢詩や和歌を入れたり、大黒天、弁財天などの絵を入れて威厳

と親しみを受けるように考案されており、いずれも藩札発生以前のものである。然し、これらの札が明歴年(一六五七)頃より余り振わぬ状態に落こんで行った時、「福井藩札」が幕許を受け第一号の藩札として登場し、幕府の貨幣統一方針の一角は破れたのである。それを魁として、財政に困窮した諸藩は争つて、これにない、続々幕許を得て藩札を発行したが、公許を受けず発行したところもあつた。

藩札は領民が領主に対して柔順に服従し流通したが、その地の豪商を起用し、その財力を背景に利用した。「札元」はその地の名家であつたので、その信用度の点でも効果的であつた。藩札の最盛期をその伝播の有様を知るのに便利なように年表体に記すと次の如くなる。寛文元年(一六六一)より宝永四年(一七二七)迄約四十七年間を前期時代の藩札表と仮称しておくことにしよう。初期は関西以西の藩が多いために銀札が多い。また、大藩が続々と札遣いした点は特記してよいのではないか。

年号	干支	発行藩名
寛文元年 (一六六一)	辛丑	福井藩・藩札の初め 松平越前守光通、四十五万石
寛文二年 (一六六二)	壬寅	福井藩六匁銀札
寛文三年 (一六六三)	癸卯	岸和田藩 岡部内膳正行隆 五万三千石
寛文五年 (一六六五)	乙巳	大垣藩 戸田采女正氏信 十万石
寛文六年 (一六六六)	丙午	福井慶松金屋札 尾張藩 徳川中納言光友 六十一万九千五百石
寛文七年 (一六六七)	丁未	尾張 新札発行、旧札引揚げ 尼ヶ崎藩 青山幸利 四万八千石
寛文十年 (一六七〇)	庚戌	宇和島藩 伊達遠江守宗利 七万二千石 飛騨高山藩金森長門守頼業 三万七千石
延宝元年 (一六七三)	癸丑	柳河藩 立花飛騨守鑑虎 十万九千石
延宝二年 (一六七四)	甲寅	松江藩 松平出羽守綱隆 二十五万二千石
延宝三年 (一六七五)	乙卯	出石藩 小出信濃守吉重 五万石 姫路藩 松平直矩 十五万石
延宝四年 (一六七六)	丙辰	岸和田藩 岡部内膳正行隆 五万三千石 鳥取藩池田因幡守光伸 三十二万石
延宝五年 (一六七七)	丁巳	津山藩 森伯耆守長武 十八万六千五百石 萩藩 毛利大膳大夫綱広 三十六万九千石 尼崎藩 (前出)
		麻田藩 青木民部少輔重兼 一万二千石

年号	干支	発行藩名
延宝五年 (一六七七)	丁巳	平戸藩 松浦老岐守鎮信 六万三千石
延宝六年 (一六七八)	戊午	岩国藩 吉川監物広嘉 六万石 徳山藩 毛利日向守就隆 四万五千石
延宝七年 (一六七九)	己未	小倉藩 小笠原遠江守忠雄 十五万石 和歌山藩 徳川中納言光貞 五十五万五千石
延宝八年 (一七八〇)	庚辰	岡山藩 池田備前守光政 三十一万五千石 赤穂藩 浅野長直 三万五千石 徳嶋藩 蜂須賀淡路守綱通 二十五万七千石
天和元年 (一七八一)	辛酉	豊岡藩 京極甲斐守高住 一万三千石
天和二年 (一七八二)	壬戌	福山延宝札 水野日向守勝種 十万石
貞享元年 (一八六四)	甲子	岸和田藩 (前出)
貞享二年 (一八六五)	乙丑	福井天和札 (前出)
貞享三年 (一八六六)	丙寅	岸和田 (前出)
元禄元年 (一六八八)	戊辰	熊本藩 細川越中守綱利 五十四万石
元禄二年 (一六八九)	己巳	尼崎 (前出)
		柳河藩 (前出)
		大垣 (前出)
		仙台金札 伊達陸奥守綱村 六十二万石
		佐土原藩 島津但馬守久寿 三万七千石

年号	干支	発行藩名
元禄四年 (一六九一)	辛未	大聖寺札使用禁止 前田美濃守 利明 七万石
元禄五年 (一六九二)	壬申	郡山藩 本多忠平 十一万石 岸和田藩 (前出)
元禄七年 (一六九四)	甲戌	白河藩 松平少将直矩 十五万石 丹後田辺藩 牧野因幡守英成 三万五千石
元禄十年 (一六九七)	丁丑	浜田藩 松平周防守康官 六万石
元禄十一年 (一六九八)	戊寅	柳生藩 柳生但馬守俊方 二万石
元禄十二年 (一六九九)	己卯	柏原藩 織田山城守信休 (のぶ やす) 二万石
元禄十三年 (一七〇〇)	庚辰	宇和嶋藩 (前出)
		丸岡藩 有馬日向守清純 五万石
		会津藩 保科中将正容 (まさか た) 二十三万石
		三田藩 九鬼和泉守隆久 三万六千石
		津山藩 松平越後守宣富 十万石
		前橋藩 酒井雅楽頭親愛 (ちか よし) 十五万石
		尼崎藩 (前出)
		三田藩 (前出)
		富山藩 前田大内蔵正甫 (まさ とし) 十万石
		福山藩 松平忠雅 十万石
		庭瀬藩 板倉主水亮重高 二万石
元禄十五年 (一七〇二)	壬午	福井金屋札 (前出)
元禄十六年 (一七〇三)	癸未	和歌山藩 (前出) 徳川中納言綱 教

年号	千支	発行藩名
元禄十六年 (一七〇三)	癸未	高知藩 山内土佐守豊房 二十四万二千石 松山藩 松平隠岐守定直 十五万石 福岡藩 黒田筑前守綱政 四十三万三千石 松山高梁藩 安藤信友 六万五千石 越前勝山藩 小笠原相模守信辰 (のぶとき) 二万石 但馬大藪旗下
宝永元年 (一七〇四)	甲申	広島藩 浅野安芸守綱長 四十二万六千石 水戸金札 徳川中納言綱条(つなえだ) 三十五万石 松山藩(前出) 平戸藩 松浦肥前守棟(たかし) 六万七千七百石 秋月藩 黒田甲斐守長重 五万石 柳河藩(前出) 高知藩(前出) 久留米藩 有馬玄蕃頭頼元 二十一万石 飯田銭札 松平忠喬 四万石 仙台銭札(前出)
宝永二年 (一七〇五)	乙酉	丸亀藩 京極佐渡守高或(たかもち) 五万一千四百石 丸岡藩 酒井若狭守忠固(ただその) 十万三千五百石 水戸金札(前出)
宝永三年 (一七〇六)	丙戌	福岡藩(前出)
宝永四年 (一七〇七)	丁亥	幕府全国藩札禁止令

江戸時代中期の藩札

宝永二年(一七〇五)幕府は全国の藩札調査にのり出した。藩札を発行しない藩もあり、嫉妬の苦情もでて、それらの藩は、相謀って幕府に対し、藩に紙幣(藩札)の発行を許可せられることは天下の金融上において通貨に交換、為替その他種々の手続きを要する等の弊害があるので、この発行通用を禁止されたいとの旨を誓願する藩が多数あった。しかも幕府もまた財政困難で、元禄八年には金銀改鋳を行い、悪貨を発行したのもあって、遂に宝永四年(一七〇七)十月全国の藩札を禁止するの強行策に踏切った。この幕令は藩札にとっては第一次の大災厄というべきもので、藩札もおいおいその価値を認められ、取引の便な点、益々盛んになる矢先の禁令であった。これがため、全国各地で藩札が反古になるのではないかと、大動揺が起きた。和歌山藩のごときは領民に二分だけ償還したのみで、岡山藩のように全部を償還したのは稀な例で、各地共領民は大きな損失を蒙った。この禁

令は、幕府が宝永通宝の大銭(十文銭)の通用し難きを恐れ、また札の濫発を防ぐと共に元禄宝永金銀の流通

『小田原史談』 総集編

第三巻 五月に刊行

以前から発行が待たれていました『小田原史談』総集編第三巻が、漸く五月に出来上がりました。

第一巻(一号~五十号・絶版) 第二巻(五十一号~百二号・絶版)と異なりますのは、小田原市立図書館の援助により索引が付けられたことで、より一層総括編としての役割を果たすことが出来て、非常に好評です。本書は市販されず会員のみを対象とした限定出版で、原価を割って会員に提供されています。

希望される方は特別会費として二千元を添え、役員又は地区委員を通じて、或いは、直接に向山保管担当者に申し込んで下さい。郵送希望者は、送料五百円計二千五百円を振替口

を図ったものといわれている。(小田原市史編さん室) (続)



時宗の開祖一遍と

その開基他阿真教(1)

岡部 忠夫

一遍の生誕地

去年の五月、瀬戸内の旅の最後は松山で、宿は道後にとった。前日、市立子規記念博物館の見学だけではものたりないと、道後温泉本館を一巡した後、辺りを歩き廻っているうち、一遍上人生誕の地、宝蔵寺の案内板が目に入った。その案内は、市や観光協会あたりで掲げたものでない。宝蔵寺の住職が書いたものであろうか、筆太の立派な字体であった。

ゆるやかな坂道である。洒落た街灯の火屋の真下に突き出た赤いプラスチックの看板に、黄色の文字でネオン坂とある。夜ともなれば人を招き寄せるだろうが、坂の両側の飯屋や旅館は、ひっそり閑として見る影もない。

百メートルも登ったであらうか、山門が目についた。宝蔵寺である。

山門の左手前に「南無阿弥陀仏」と彫られた大きな石柱が建っている。二メートル余りもあるだろうか……。

踊るような力溢れる独特の字体である。近寄ると、下の方に一遍上人御真筆とある。

石柱の新しいさや彫りの深さからして、最近建てられたものであるのがすぐ判る。彫りが深いのは、最近の石材加工技術の進歩を物語るものであるのは、云々までもないが、それだけに彫りの寿命は長いであろう、これから何百年もつであらうか……。

右手には、一遍上人誕生の地を示す石碑が置かれていた。

色里や 十歩はなれて
秋の風

翠色をした自然石に彫られていて。その傍らに解説板が立っている。

明治二八年一〇月六日、快晴の日曜日だったの
で、子規は同居の漱石と道後へ吟行、その日のことを記した『散策集』に、「宝蔵寺の山門に腰かけて」と前書きしてこの句がある。文字は句集『寒山落水』の自筆拡大……
(以下略)……

ネオン坂は、明治時代の名残を引き継いでいるわけだ。それにしても流石である。遊里を巧みに詠み込んで

秋の風は無色と云われている。春の風ならば生暖かくて句にはならない。尤も子規ならば、春には春の相應しい句を詠み込んだに違いないと思うのだが……。

正岡子規は、松山の出身で、近代俳句の基礎を打ちたてた人としてよく知られている。夏目漱石は、云々までもなく小説「我輩は猫である」とか「坊ちゃん」で有名である。二人は、慶

下略……

応三年(八七)の生まれで、共に明治十七年(八四)九月、大学予備門に入学している。二人の出会いには、共に落第という偶然が関係していると言ふ説もある。

漱石は、明治二十六年(八三)東京帝国大学文科大學英文科卒業、大学院に進んだ。同二十八年四月、愛媛県尋常中学校(松山中学校、現松山高校)に赴任。一方、子規は明治二十四年、文科大學哲学科から国文科に転科。同二十六年三月正式退学。同二十八年三月近衛師団の従軍記者を志願したが、戦場の後を追いかけるような形で二カ月たらずの従軍であった。五月、近衛師団とともに内地に引き揚げの船中で結核が再発して咯血、故国に上陸後、入院療養につとめ健康が次第に回復。八月末、松山に帰り、漱石の下宿愚陀仏庵にこ

まで互いに名前は知っていたが、子規が漱石に近寄って親友になったという。親しくなってきたから互いに落第した話が出たかもしれないが、それよりも、司馬遼太郎氏のエッセイのが相応しく思われる(新潮日本文学アルバム「正岡子規」)。

子規は階下に住み、十月半ば過ぎの五十余日、毎日顔をあわせるようになった。

親しくなったのは、同二十二年寄席の話からだという。漱石は、「万事が弟扱い」で「自分の思ふ通りに僕をひっぱり廻した」と話している。一方、子規は子規で「談心の友」「畏友」として、互いに敬愛しあった。……(以

十九年四月、熊本第五高等学校の講師として赴任。松山にいたのは僅か一年間であったが、後年、松山を舞台に名作「坊ちゃん」を発表した。

そして、「坊ちゃん」にこう言わせている。

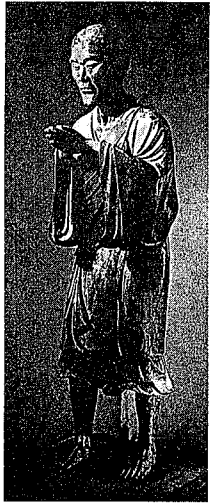
……北へ登って町のは
ずれへ出ると左に大き
な門があつて、門のゆ
き当たりが御寺で、左
右が妓楼である。山門
のなかに遊廓があるな
らう、前代未聞の現象
だ。

一遍上人の生誕地の前に
今でこそ業態が変わつた
とはいえ、歓楽街がある
と、ちよつとそぐわない
感じもする。

句碑に接して、一遍上人
の歌碑があつた。一遍の
生誕七百年、没後七百年
に当たるのを記念して、
平成二年三月、一遍会と
地元有志によつて建て
られたものであつた。

旅衣 木のねかやのね
いづくにか

身のすてられぬ
ところあるべき



一遍木像
後200年
没後7年
一文の作
頃(1475) 宝蔵寺所蔵

また、解説板に頼ろう。

「旅衣」は旅に着る衣、
その「着る」がつぎの「木」
にかかる。捨てひじり一
遍には、木の根、萱の根、
山野のどこにでも身を捨
てる所があつた。

この歌は、正応二年(二
元七)七月、生涯にわたる
遊行の最後、病身を上げ
まして淡路を旅している
とき、「みちのほとり、つ
かのかたはらに身をやす
め」て詠んだもので、捨
てひじり一遍の生きざま
がよく示されている。
翌八月、一遍は兵庫観
音堂で亡くなられた。

この歌は、「一遍上人語
録」に出ているが、歌は、
『語録』の编者から離れ時
代を越え、今なお、心を打
つものがある。

一遍は、水軍を率いた伊
予の豪族河野氏の出であ
るが、河野氏が史実に名が

てくるのは源平合戦から
ある。

祖父通信は、その水軍を
もつて源氏に味方し、壇
浦の戦いで大きな戦果を
挙げたと伝える。その功績
によつてか、通信は北条時政

の娘を妻にしている。鎌倉
幕府の権力者を舅に持ち西
国一の武将の立場は、揺る
ぎなきものになつたであ
らう。ところがどうゆう訳か、
承久の乱(三三三)では、北
条氏に背き後鳥羽上皇側に
加担して敗れ、通信は奥州
に流され、一族は、四男の
通久を除いては皆没落し
た。一遍が生まれたとき、
通信の五男の、父通広は、
出家して如仏と名乗り、こ
の宝蔵寺に隠遁していた
いう。

一遍は、出家して太宰府
で浄土宗の修行をするが、
父の死とともに故郷に帰
つた。しかし、一族の所領争
いに巻き込まれ総てをなげ
すて、遊行の生活に入り、
賦算(南無阿弥陀仏のお札配
り)と踊り念仏によつて念
仏をひろめることになる。

一遍の回りには、帰依し
た数多くの僧・俗が取り囲
み、自然と一遍を聖と仰ぐ
集団となり、幾多の困難が

伴う遊行の旅をもつとせ
ず従つていったのも、彼が
指導者として、庶民を心服
させる魅力を具えていたの
は云うまでもない。

その集団の人々は時の
衆、つまり「時衆」と呼ば
れるようになる。

念仏を唱えながら遊行
は、感興によつては踊り念
仏を伴つた。踊りに伴う恍
惚状態は、覚めた目には集
団催眠に写つたかも知れな
いが、彼等を現実の苦惱か
ら遠ざけさせる役割をも
ち、一遍の教えは庶民から
武士まで広く浸透してい
つた。

一遍は、生前から「わが
化導は一期ばかりぞ」と、
一定の寺に居を定めず、自
分の死後に教団を残そうと
する意志は毛頭なかつた。

一遍は死期の近いのを知
ると、それまで持つていた
教典の他の書籍は阿弥陀經
を唱えながら焼き捨てたと
いう。また、葬儀は行つて
はならぬ、遺骸は野に捨て
獸に与えよ、と言ひ残した
と伝える。

没したのは正応二年(三
三六)八月二十三日朝辰の刻
(午前八時頃) 兵庫観音堂
(眞光寺)で、禪定に入る如

く示寂した。そのとき、時
衆の中には、一遍を喪つた
悲しみの余り後を追ひ、入
水自殺する人が出る程で
あつたという。

さらに川田順の詩碑が
立つていた。川田順は小田
原に縁のある人で、国府津
の今の富士通の研修所にあ
る所に住んだことがある。
この碑も一遍の生誕七百五
十年、没後七百年を記念し
て建てられたものだった。

詩碑を読み取つている
と、「どうぞ本堂にお上がり
下さい」と声がかつた。
住職であつた。気がつか
なかつたが、境内の片隅で草
むしりをしていただ。

「坂道には、寺と縁のない
店が並んでいます……」
尋ねた訳ではないが、住
職は本堂へ入つて来ると、
すぐさま話しかけてきた。

住職の拘りの気持ちがわ
かるような気がした。入口
に歓楽街がなければ寺域は
もつと落ち着いた雰囲気
に包まれ、訪れる人も多
いかも知れない。

「明治政府がこのよう
な環境の処に遊ぶ場所を選
んだので……」

住職の物静かな言葉の端には、思い切れなさが残っている感じだった。

残念ながら私には、遊廓が一遍生誕の聖地の門前に設けられた経緯を知らない。云えることは、一遍の存在が疎かにされたことである。

今でこそ高校の教科書には、鎌倉時代の新仏教の展開として、一遍の他に親鸞、道元、日蓮等の事績が載っているが、戦前、旧制中学の日本史教科書には、殆ど記されていないかった。

堂内の様子は、一般に見られる形であるが、一つ違うのは一遍上人の像が安置されていることである。

先刻、住職が本堂に招じたのも、この像のためであろう。この像は国の重要文化財に指定されている。

実物に接することが出来るとは考えても見なかった。住職の好意は嬉しかった。書籍に載る一遍の彫像は、皆この宝蔵寺から出ているのだ。

脛もあらわな粗末な衲衣で、前かがみに合掌し、しゃくれた顎と張り出た後頭部の部張った風貌は、永年香

をたいて供養してきたせいか黒光りしている。

この像に接し感銘して詩を捧げたのが、歌人川田順で、先程読み取っていた詩碑がそれである。

川田順がこの寺を参拝したのは、昭和三十四年と云うから、彼が七十六歳の時のこと、自叙伝を上梓した年である。

糞掃衣すその短くく
るぶしも臍もあらはに
わらんぢも穿かぬ素

足は 国々の道の長手
の土をふみ 石をふみ
来て にじみたる血さ

へ見ゆかにいたましく
頬こけおちて おとが
ひも しゃくれ尖るを

眉は長く目見の静け
く たぐひなき敬虔を
もて 合せたる掌のさ

きよりは 光さへ放つ
と見ゆれ 伊豫の國
伊佐庭の山のみ湯に來
て 為すこともなく日

をかさね 吾は遊ぶを
この郷に生れながら
も このみ湯に浸るひ
まなく 西へ行き東へ
往きて 念仏を働化した
まふ みすがたを ここ
に残せる 一遍上人

なお、宝蔵寺は、天智天皇の四年(六六五)の開基と伝える古刹で、始め法相宗に

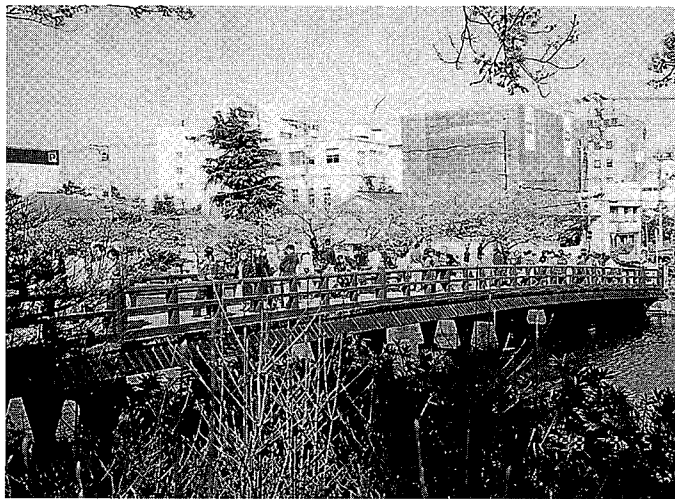
写真今昔

属し天長七年(八三〇)天台宗に改められたという。時衆の寺として再興されたの

は、一遍が没してから三年経った正応五年(一二五二)の事と云う。(続)

下は「学び橋」の渡り初め風景である。年月がハッキリしないが、当時、町立小田原第二尋常高等小学校校舎の新築落成したのが、昭和四年三月十二日であるから、おそらく、その頃のものであろう。今から六十九

年前となる。現在の学び橋は二代目となる。それについても、風俗の移り変わりが甚だしいのが目につく。服装は、全部和風の人達だけである。(哲)



曾我谷津の宗我氏と

曾我氏とその末裔(7) 付 菊川の事

市川 一郎

はしがき

宗我神社

一 本宮

曾我氏台頭 曾我氏の出自

北条時代

(小沢大明神) (八幡神社) (桓武社)

豊臣氏時代 徳川時代

明治時代 社殿の改築と無格社の合祀

曾我都比古神社と唱えられなくなった時期

日本武尊命石板奉納

二 構内社 (以上 一六八号)

1 攝社

2 末社 宿弥社 稻荷社

3 その他 阿夫利社 十郎五郎社

構内の配置

三 お祭り

平安期から北条時代 安土桃山時代

代 江戸時代 明治時代 大正・昭和時代 現在

国立史料館蔵神社明細書

(以上 一六九号)

四 宗我神社と神主

宗我神社創建時代 北条氏時代

徳川時代 幕末(神主養子縁組・宗我播摩守の住所) 明治以降略譜 御支配関係 (以上 一七〇号)

宗我神社の勅化(以上 一七一号)

曾我谷津の曾我氏とその末裔

一 曾我氏創立時代

二 曾我氏滅亡

三 神保家帰農 (以上一七三三号)

正泰寺 神保家城地拝領

曾我太郎祐信屋敷跡 堀の跡と城内

開発 若宮八幡宮 矢の根井戸

新屋敷に移転 (以上本号)

四 旧阿弥陀堂

所在地 大光院の斜め前梅林所在説

五 菊川稲荷

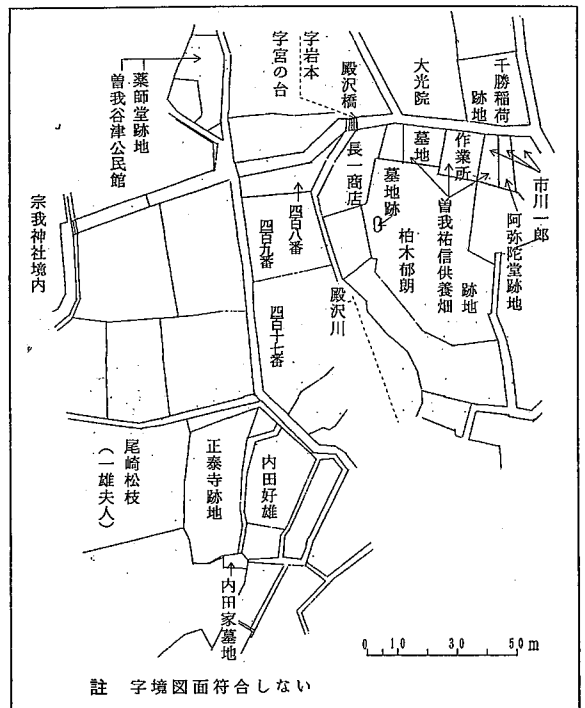
付 曾我神社と曾我氏の歴史総合年表

曾我谷津の曾我氏とその末裔

正泰寺

正泰寺は上曾我の瑞雲寺の末裔で、曾我谷津公民館下の四つ角を下り、三つ角を左折した左側の図一の所にあった。左折する手前に赤門があったと云う(内田好雄氏母堂)。

正泰寺開山の経緯を想像すると、永祿二年(二五五) 曾我家滅亡の際戦死した大手口の守将神保刑部、その他の菩提を弔う為に、神保家として絶家を継いだ甚九郎祐吉が正泰寺を建立し、梅叟和尚を開山に迎えたのではないかと考えられるのである。



神保刑部が永祿二年(二五五)に戦死した大手口は曾我谷津字宮の台で、俗稱台畑と言います(曾我地誌史料集) 正泰寺に近い。

開山は梅叟梁木で、天正十四年(二五八)三月二日に入寂している。

神保家初代の甚九郎は天正十九年(二五九)五月八日に卒去し、二人は同時代に、指呼の間に生きていた。

約二百年前正泰寺の檀家が法輪寺と瑞雲寺七軒に別れたとされているが(大部分が明治以降の姓であるが)いずれも神保姓である。

法輪寺の開山は延文三年(三三三)で、天保二年(八三三)火災により過去帳が焼失したので、神保家が何時檀家になったか不明である。神保家の墓地は前記曾我谷津四七

九番地で、法輪寺の本墓地とは離れている。墓石は剥離していて墓銘は判読出来ないが、檀家の分裂が無住の遠因になっているかとも考えられるが、安政三年(八五三)には既に無住になっており(寺請証文 明治初年に取り壊されたようだ)。

神保家城地拝領

十六代 祐次 八郎左衛門 二代慶長十五年(一六〇)卒
曾我家城地、堀跡等およそ二〇
余石の田畑を開発し、若宮八幡宮、城内の宮、蔵、矢の根井戸等を拝領した。祐信公拝領の刀

は連続している。

曾我太郎祐信屋敷跡

曾我太郎祐信屋敷跡地は風土記に方一町とあるが、『小田原史談』第四六号(一五宅)に、神保榮氏が「曾我氏の館跡」として発表しておられるので、図二(97・1)『小田原史談』一六八号)にその輪郭を紹介した。

堀の跡と城内開発

風土記に「曾我太郎祐信屋敷跡南方に在、城前寺の後にて方二三町許、四方共道を境界とし、土手の形尚存する所あり、是外構なり、今は陸田を開き民家あり云々」とある。堀の作られた時期と位置は不明であるが曾我原四四六番地鳥海源三郎家(明屋敷、曾我別所五一八番地(飛び地)柳川稔氏付近を「堀の内」の呼び名がある。

神保家所蔵の文化十三年(八六)

の絵図には同家の前の道南側に字内堀と記入されており、此の地に隣接して柳川宅に続く土地の所有者市川勇氏も共に内堀と呼んで居られる。

図二の点線で囲んだ所は明治初年には田圃であったようで、図中神保武士方を俗に田中と呼んでいる。同家の斜め前には明治の中頃まで大きな池があり、夏は子供たちの水浴び場になっていたとの伝承がある。(神保憲明、神保泰治氏)

次に神保家の前の道で東西の三又

路間の高低差は約二mあるが、西の三又路に近い石綿信子氏宅の井戸を以前掘った時、四m位のところから葦が沢山出た(市川忠雄)。又東の三又路に近い、真壁繁氏の前の物見塚古墳を取壊の際、鉄釘の一部を棄てたという伝承のある場所は昔の堀跡であろう。図二に四八、五〇、五二の等高線を記入したので、お堀の場所を検討するのも一興であろう。

若宮八幡宮

神保家から何時か氏子持ちとなり、今は小さな祠で、向、前谷津の氏子で細々と維持されているが、明治三十年には氏子四一名からの寄附金、利息その他で百十三円余を集め社殿を改築し、明治三十二年に寄附金八円余を集め、六円で人形芝居を買い、七円九十銭でお祭りをして(八幡社の帳面)。

矢の根井戸

神保家所蔵の文化十三年(八六)の絵図では、菊川が市川博氏屋敷の南側から旧道に沿って流れ殿沢川に入っている。その中程の北側に矢の根井戸がある。天保十二年(一八四一)の風土記には、「字前田の田間に在り、曾我兄弟が鎌(やじり)を磨いた井戸と言ひ、既に埋もれり」とある。旧道沿いの畑にある貯水池の辺りとも言われているが、筆者はこの墟下に在ったと考える。(図二)此の辺りは殿沢川の扇状地で地下七・八〇

のところは薄い砂利層があり、今も年間を通じて地下水が流れている。それは道祖神の前の側溝で見ることが出来る。

昔は樹木が鬱蒼と繁っており地下水も豊富であったので、前記の墟に水口があり、その下に水溜まりが出来ていてこれを「井戸」と呼び、生活の用に供していたと思ふ。此処からは殿沢川迄田圃で、稲作が行われ「この田で取れた米を曾我氏の食膳に供えた」と市川博家に伝承されており、同家を俗に「おまえだ」と呼ぶが、前記の理由で博氏は御前田と言ふのが正しいが、うちでは「おまえだ」と言っていると話された。国後の刀不明である。

新屋敷に移転

神保家の墓地に前記のように「□

定門」と、その右に寛永二年と読める墓がある。十七代八左衛門が卒去したのが寛永四年であるので、同人が建てたものと考えられるので、これ以前に新屋敷に移転したのであろう。

参考

□定門は禪定門と考えられる。今は戒名で定門は信士より下位になつてはいるが、昔は居士より上位に扱われていた。その例として北条時頼は「最明寺殿道崇禪定門」である。
〔戒名法名神号洗名大辞典〕

(続)



神保家の墓碑

露国・日露の役俘虜のこと(17)八十七年ぶりのお礼後編(8)

内田善作記
吉田雪子編

「日露戦役従軍記録書簡往来」

隠岐威重

拝啓 その後皆々様には益々御健全に涉らせ候由、喜び候。次に私事も相変わらず無異消日罷在候間、ご休心くだされ度願ひあげ候。次に先日十一月六日出

明治三十七年十一月二十六日
午後三時羊頭村北方高地を占領す。

三中队、第六中队、は前方高地を占領する、の命を受け、我が第四中队の一部の其の命に接し攻撃を開始候処、敵は機関砲八門を有し、我が軍は砲撃をせずして歩

二伸 先日のお絹様よりお尋ねに相成り候、母上、浜、お絹様よりご投函の書面は不着に付きご了承くだされ度、お絹様とおはつ様の御投函の書面は將に拝見致し候宜しく御礼御伝言くだされ度願ひあげ候。

鳥、狩野へも宜しく御伝言相成り度。又後日に至り余暇之有り候節は年賀状差出し申す可く候に付御承知くだされ度。且つ又、伊東午之丞、伊東長次郎様、松坂屋様、河内屋様、淡海様、万屋様、お茶屋様、菊屋様へも既に書面差し出す可き筈の処、前述の通り一度一通の規定故其の意を得ず候。先は無異御通知まで申し上げ置き候。次に毎度恐れ入り候へ共、岩下賢之助様より書簡一通、片野よし子様より真綿若十、片岡永左衛門様より新聞一日分、中宿よりシラミ除紐二本御送与くだされ候に付き、宜しく申し述べくだされ度願ひあげ奉り候。

の只今ご起居の位置をご通知くだされ度、又先日曾我村出身の穂坂徳蔵上等兵御依頼にてご送付くだされ候ジャケツ、シャツ並びにカイロにカイロ灰、將に拝受仕り候間御休心くだされ度、誠に恐れ入り候へ共、二重封筒並びに半紙罫、新聞紙中に御封入の上ご送付くだされ度呉々もお願ひ申し上げ候。先ずは無異御案内まで申し上げ候。草々 頓首

その後寒気甚だしきにも拘らず、皆々様益々御機嫌よく御起居遊ばされ且つ又親戚御一同様にも御別状御座なく候由、喜び候。次に私事も無異軍務に従事罷在候間、外慮ながら御休心くだされ度親戚一同様へ宜しく御伝言くだされ度ねがいあげ候。

實は去る一日並びに六日出の書面に種々申し上げ度事も之有候へ共、多忙の為、素志を果たさず今日委細申し上げ可くの処、只いまの処、後山羊頭村北方の高地に露営罷在候に付、何分其意得ず候間、左に少々ばかり戦闘の模様申し上げ可く候。

十月十一日
内田重兵衛様
御家内御中
拝啓、日増しに寒気甚だしく候処、祖父始め皆々様御清栄に御起居遊ばされこ

う由、この上なく喜ばしく存じあげ候。最早、本年も余日僅かに相迫り定めて店頭御多用と御察奉り候。下つて迂生事も無異引き続き軍務罷在候間、御放心くだされ度願ひ上候。親類御一同様へも年賀状差し出す可き処、今後多用に取り紛れ失礼申し上げるやもはかり難く候間片野屋様、中宿、宮の前、多古、国府津、江

十一月十一日
下家屯にて

十一月二十五日夜後備歩兵第一連隊、第一中队、第

然し他中队に付、確たる事は申し上げ難く候。又多古の前なる金物店の飯泉の小川常吉様も第五中队に勤務遊ばし候に付、日々面接仕居り候。

内田重兵衛様
御家内御中
拝啓、日増しに寒気甚だしく候処、祖父始め皆々様御清栄に御起居遊ばされこ

う由、この上なく喜ばしく存じあげ候。最早、本年も余日僅かに相迫り定めて店頭御多用と御察奉り候。下つて迂生事も無異引き続き軍務罷在候間、御放心くだされ度願ひ上候。親類御一同様へも年賀状差し出す可き処、今後多用に取り紛れ失礼申し上げるやもはかり難く候間片野屋様、中宿、宮の前、多古、国府津、江

内田 重兵衛様 拝

十一月二十五日夜後備歩兵第一連隊、第一中队、第

然し他中队に付、確たる事は申し上げ難く候。又多古の前なる金物店の飯泉の小川常吉様も第五中队に勤務遊ばし候に付、日々面接仕居り候。

内田重兵衛様
御家内御中
拝啓、日増しに寒気甚だしく候処、祖父始め皆々様御清栄に御起居遊ばされこ

う由、この上なく喜ばしく存じあげ候。最早、本年も余日僅かに相迫り定めて店頭御多用と御察奉り候。下つて迂生事も無異引き続き軍務罷在候間、御放心くだされ度願ひ上候。親類御一同様へも年賀状差し出す可き処、今後多用に取り紛れ失礼申し上げるやもはかり難く候間片野屋様、中宿、宮の前、多古、国府津、江

れ度願いあげ奉り候。この封筒の書面御手数恐れ入り候へ共、江島へ御届けくだされ度願いあげ候。岩下清之助様にも是非御面会申し度、日夜思い居り候へ共、何分多用の為其の意を得ず、然し漸次攻囲軍の周圍狭 相成り候に付きその節はきつと御面会申す可く今より待ち居り候。

草々 頓首

明治三十七年十二月十六日

在 清国盛京省

陳笠山 麓にて

内田善作 拜

内田父上様
御家内御中

明治三十七年十二月二十三日……

羊頭村西方半島を占領す。

拜啓 その後は皆々様御機嫌よく目出度く御越年遊ばされ候御事と遠察致し候。就いては私事も無異消日罷在候間御休心くされ度。劫説、去る二十二日、鳩巢山の攻撃も敵は爆弾並びに地雷と機関砲を有し非常に強行に抵抗仕り居り候。占領仕り候間、御休心くされ度。右戦闘結果詳しく申

し上げ候へ共、当後備歩兵第一連隊は当分の内、休養の為後方なる利家屯なる部落に転所するに付、本日は多忙にて誠に申し上げ兼ね候間、何れ一月一日以後詳しく申し上げ候間悪しからず御了承くだされ度、親類皆々様宜しく御伝言相成り度。宮の前の叔母様にも特別宜しく御伝言相成り度呉々もお願い上げ候。

定めて内地も寒気甚だしき事と存じ候間祖父様始め皆々様身体御健康に御保養遊度祈り居り候。先は無異御通知まで申し上げ候。

二伸 先般申し上げ置き候、栢山の米山兼吉様墓前にも此度は閑暇之有り候に付、是非共参拝仕る心組に付宜しく御了承の程願い上げ候。

年賀状の各々様に差し上げ度とは存じ候へ共父上様より宜しく御伝言相成り度呉々願い上げ候。

十二月二十六日

在、清国 鳩巢山にて

内田善作

内田重兵衛様

ご家内御中

新年の吉慶日出度申し納め候。御一同様益々御機嫌

よく御揃いで御越年なされ候御事と存じ奉り候。

劫説 昨年中は一方ならぬ御交配に相成り有り難く御札申し上げ候。尚本年も相変わらず御厚情の程願い上げ候、降つて迂生儀も引き続き無異従軍罷在候間、御休心くされ度、先は年頭御祝辞まで申し上げ候。

実は来る二十六日にも書面差し出すべき日取りには候へ共、来る二十一日より戦闘開始に相成り候に付、書面差出さざるやもはかり難きに付、御了承くだされ度。何れ一月一日には差し出し申す可く候。御了承の程願い上げ候。

片野屋様、美の屋様、中宿、宮の前等へも詳しく申しあげ度候へ共、略儀申し上げ置き候間宜しく御伝言くだされ度、尚左の皆々様より送品くだされ候に付、毎度恐れ入り候へ共御札の儀御取り計らいくだされ度願い上げ候。

別紙の書面は御手数様恐れ入り候へ共、皆々様へ御回し下され度願い上げ候。

宮の前より封筒に書簡、中山利八様より封筒に半紙野、内田絹子様、和田はつ子様より封筒に新聞紙、宮

の前より御申し越しに相成り候砂糖菓子、正に拝受仕り候。 内田善作

内田重兵衛様

那波屋の姓、失念仕り候間、御記入くだされ度願い上げ候。

新年の吉慶日出度申し納め候。御尊家御一統様益々御機嫌よく御揃いで御越年遊ばし候御事と存じ奉り候。

劫説 昨年中は一方ならぬ御高配に相成り有り難く御札申し上げ候。降つて迂生儀も引き続き無異従軍罷在候間慮外ながら御放心下され度。

先は年頭の御祝辞まで申し置き候。 草々 頓首

一月一日 内田善作

伊東長次郎様

伊東牛之条様

飯山房次郎様

淡海米次郎様

岩下惣次郎様

越川金次郎様

細谷左次郎様

明治三十七年十二月二十七日……第七師団歩兵

第二十六連隊と前哨を交代す。

羊頭村南方高地攻撃。旅順陥落。旅順旧市街へ移転。(続)

訃報

大嶋保孝氏(賛助会員)

(株)伊勢治書店取締役社長 去る三月一日逝去されました。 享年五十二歳

河合浩太郎氏(小田原史談会理事 小田原市本町2-518) 去る三月二十日逝去されました。 享年六十五歳

植田武夫氏(小田原市南鴨宮3-49-5) 去る四月四日逝去されました。 享年七十八歳

綾部ユキ子氏(小田原市中町3-3-22) 去る五月三十日逝去されました。 享年七十八歳

高田喜久三氏(元小田原史談会会長 小田原市浜町3-11-4) 去る六月十二日逝去されました。 享年八十七歳

ご冥福をお祈りいたします

小田原の富士信仰 三

小林 謙光

はじめに

足柄のふじ道と富士講

一 丸東講

- (一) 丸東講のおこり
- (二) 丸東講の分布 (以上一七二号)
- (三) 丸東講の先達
- (四) 小田原市の丸東講
- (五) 足柄下郡箱根町の丸東講 (以上一七二号)

二 丸岩講

- (一) 丸岩講のおこり、(二) 丸岩講の組織、(三) 丸岩講の先達、(以上本号)
- (四) 小田原市の丸岩講

三 東 講

- (一) 東講の系譜と分布、(二) 小田原市の東講、(三) 東講について(考察)

四 その他の講

- (一) 丸花講、(二) 丸嶽講、(三) 丸藤講、(四) 丸福講、(五) 小田原竹の花の講、(六) 足柄郡檀中、(七) その他、(八) その他

二、丸岩講

(一) 丸岩講のおこり

丸岩講は武州岩槻、春日部に起こった講である。足柄地方の丸岩講で最古の石造物は、足柄上郡中井町半分形の富士浅間神社にある富士浅間大菩薩碑で、文政三年(一八〇) 丸岩講

中と刻まれており、当時、この地方に丸岩講が存在していたことを物語っている。次に古いのが須走浅間神社元宮司小野家(当主繁氏)にある富士登山三十三度大願成就津田数右工門(相州足柄上郡川村岸講中)と刻まれた安政二年(一八五) 建立の石燈籠である。川村岸の他には、吉田嶋、中之名、内山、山田、矢名、延沢、平山、向原、塚原、小田原、平山瀬戸、都部羅野、透間、川村山北、矢倉沢、金井島、上菅我の村名が刻まれており、足柄地方にかなりの広がりを見せている。文政三年以降明治期に入る以前の丸岩講の石造物は次の通りである。

文政三年 富士浅間大菩薩碑

(半分形) ※

安政二年 富士登山三十三度石燈籠

籠(須走) ※

安政七年 浅間社石祠(下大槻)、

浅間大神碑(上曾我) ※

万延元年 仙元大菩薩碑(吉田島)

※、木花開耶姫尊碑

(鴨沢)

文久元年 浅間大神碑(松本) ※、

浅間社石祠(雑色) ※

文久三年 不動大明王・小御岳石

尊碑(赤田)、仙元大菩

薩碑(柳)、不動明王碑(半分形)

※ 文久四年 仙元大菩薩碑(塚原)

元治元年 仙元大菩薩碑(古怒田)

元治二年 仙元大菩薩碑(上大井)

※、仙元大菩薩碑(金子) ※、

不動明王・小御岳尊(雑色)

慶応元年浅間塔碑(沼代) ※、

不動大明王・小御嶽石尊碑(松本)

慶応三年 南無浅間大菩薩碑(下堀) ※、仙元大菩薩碑(八沢) ※

年代不祥 参明藤開山碑(宮ノ台)

※ 仙元大菩薩碑(西大友)

※ (註) ※印は丸岩の講紋あり。その他

は大正玉産銘により判定した。

末尾二基は年代不祥なるも明治期以前のものと推定される。

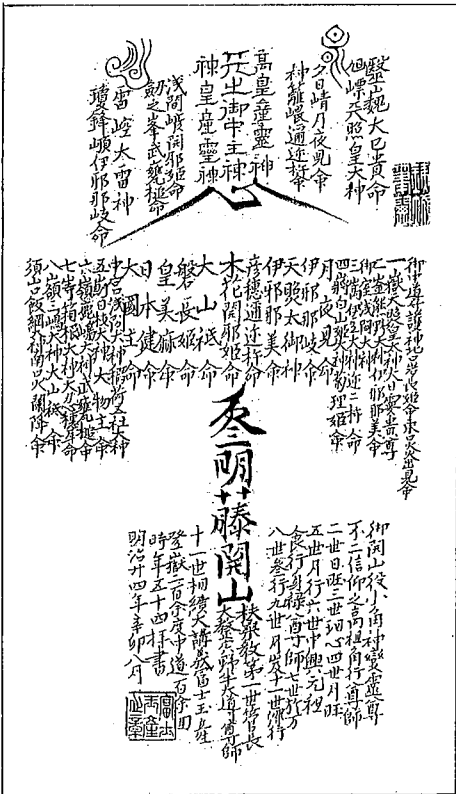
明治期以降の石造物は、明治維新の政府の宗教政策により神仏分離令が出て、富士講もその影響を受け、神道色の強い扶桑教が出来て今迄の講社がその傘下に入ったという経緯もあり、単に扶桑教と刻まれている石造物もあって、講紋がなく旧講名が確め難いものもある。次に、明らかに丸岩講と確認出来たものの年代別の数を示す。

明治 三八、大正 六、昭和 六、計五〇(合須走にある足柄地方関係石造物)

足柄地方における丸岩講の石造物分布は付図1(一七二号)の通りである。

これらの碑の中で、万延元年(一八〇)の吉田島にある仙元大菩薩碑には丸岩講元祖大寿院月岷行山、武州二代目深行幸山と刻まれていて丸岩講の系譜を知ることが出来る。又、

明治維新



付図 参明藤開山軸(御本尊) 富士玉産書、明治二十四年(和田家蔵)

玉産銘の碑の初見は安政七年(一八二六)で、それ以降の碑の半数以上に玉産の銘がある。これは全国をめぐり講を結んでいた富士玉産が、安政五年(一八二四)川村岸に定住し活動を始めた時期とほぼ一致している。

富士玉産については、岸にある「贈中教正富士玉産之碑」に履歴が刻まれているので引用する。

「富士玉産ぬしは下野国足利郡上羽田村の人にて天保九年正月朔日に生まれ始めは福地文平といひ後故ありて今の名に改む十三といふ年病に罹りては此世の人とも思はれざりしに夢に浅間の大神を拜みて日夜祈りまつりし程にさしもの病も癒えしかば今は大神の恩頼に報ひまつらんとて丸岩講に加り十八と云ふ年より国々を巡り講社を結びつ安政五年頃相模国足柄上郡川村岸に至りしに村人いと信実なりつればやがて和田喜右衛門の女を娶りここに住ひ男子一郎をぞ生れけるかくて明治七年に扶桑教興りしかば之に従ひ同じき十五年に教導職試補となり二十五年には権少教正と聞えしか其年の七月四日五十五歳にて身退られしぞ悲しきやぬしは剣術にも文字書く道にもたすぐれ扶桑教本社所々の浅間神社に額数多書きて献りしが其筆の勢にも剛く直き、心の程顯はれ結べる講社も数多く一萬に越えつべし此度講社の人等碑を建て一世の事績を後世に傳へんとこひければかく記す者は下野国人高橋市蔵

明治廿六年七月四日

玉産については以上に要約されているが、その名については福地文平とあるが、安政五年の玉産書のお伝え(野地家蔵)に玉之助の名があり、当時は玉之助と称していた。玉産の名は玉之助に由来しているものと考えられる。

玉産は川村岸に落ち着くと、岸の浅間山で二十一日間の断食をし、満行の日に左腕を傷つけ、流れる血で浅間大菩薩の神札を書き講中に配つたという。また、御伝書や参明藤開山軸に記載された修行歴(積算)を見ると次の通りである。(年齢は文書記載通りの数え年)。

- 嘉永五年 初登山十五才
- 安政五年 登山六十四度御中道七回内八湖修行 二十一才
- 安政六年 登山七十二度御中道二十回八湖七回 二十二才
- 安政七年 登山百度御中道三十三回八湖十三回 二十三才
- 明治十年 登山二百度御中道百回内八湖十三回外八湖勤行 四十才
- 明治二十四年 登山二百余度御中道百余回 五十四才

六回を達成している。また、二十三才の万延元年庚申年(一八二六)に、富士山頂剣ヶ峯に於いて血肉を以て書いた「邇二杵命開耶姫命」の木版の軸が現存しており、その入魂の程が窺われる。四十才の明治十年(一八七五)の神号軸には、「登嶽二百度中道百度内八湖十三回外八湖修行」とあり、修行を大台に乗せ大願成就を達成している。

玉産の書き残したものについては、姻戚関係にある岸八幡神社元宮司和田家(当主正徳氏)文書「御元祖御密傳」に「安政五年正月吉日二十才の時、羽田村住人大正玉山謹而書之」とあり、当時大正玉山と称していたことが判る。なお、同書は現存している玉産の文書の中では最も古く、扉に「此書者御元祖從御口授並二代々系図等記留書也猥二開キ披見致ス事禁止」とあり、玉産が秘伝としていたもので、その内容は次のとおりである。「長谷川家代々云留、御歌八首、御八湖御修行太行之記、御法家御代々畧記、御中道之記、月旺居士公事之卷」。また、「不二山大

行・御中道伝書」安政五年(野地家蔵)、「御伝書二の巻 参之卷」安政五年(安政七年(柳川家・諸星家蔵)や「不二山會保志恵和御直傳寫」明治十三年(和田家・瀬戸家蔵)などがある。

和田家には、玉産が登嶽時に使用した鈴及び「龍」や神号の書が現存している。達筆であった玉産は各所

に書を残しているが、明治十三年には富士山頂奥宮に、縦六尺五寸横四尺の樟の一枚板で「国鎮」無上嶽」の大額を奉献し、その願主となっている。金色の浮かし彫り文字の重厚なもので富士玉産銘があり、現在も奥宮祭祀殿の扉として使用されている。裏面には足柄上・下郡、大住郡等の寄付者の住所氏名が刻まれている。奥宮で頒布している扇面の「国鎮」無上嶽」の文字はこの玉産書である。なお、「眞神遊華」の大額奉献の文書があるが確認されていない。

更に、北口扶桑教元祠には「富士教会」の大額を奉献している。額縁には丸岩講の講紋と寄付者の名が刻まれている。頂上奥宮大額と同一寄付者名が数多く見られる。書体から見て富士玉産書である。

富士玉産の系譜は、参明藤開山軸(和田家蔵、付図1-2)に六世中興元祖食行身縁導師一七世於万一八世参行一九月月爰一十世深行一十一世玉産とある。丸岩講の元祖は、開成町吉田神社境内の仙元大菩薩碑(万延元年建立)に、丸岩講元祖大寿院月爰行山と刻まれていて、九世月爰が分派独立したものと推定される。同碑には武州二代目先達深行幸山の名もありこれは十世深行である。月爰行山については「不盡山會保志恵和御直傳寫」(瀬戸政雄氏蔵)に「武州岩槻駅二住又本山修験ナリ」とあり、文政十〇年富士大行月爰相伝「金城東坊御杖」(近藤家蔵)がある。本書

には教え、歌八首や太郎坊御加持などが記されている。深行幸山は同じ「不盡山會保志恵和御直傳寫」に「粕壁駅字八木崎八幡前ノ産俗名竹次郎ト云(中略)六十八年ニシテ文久元年ニ死去寺ハ寺町玉蔵院ニ葬ル真言宗ナリ」とある。安政四年に大正玉産への「御伝書」を残しており、

山北町和田家及び津田家には不二大行者深行幸山行年七十四歳と記されたお身拔がある。和田家お身拔は参の字が冠してあるが角行系の名残を止めたお身拔であり、津田家お身拔は五行お身拔である。幸山は安政五年当時、登山六十六度御中道三十三度内外十六湖修行の大願成就を達成している。なお、「御元祖御密傳」

の末尾には、「武州日光道中春日部正大先達相場不動院能登守清春末深行院、大正院」と記されている。深行院は深行幸山、大正院は大正玉山(玉産)で、これによると、幸山と玉産は共に清春の門人ということになる。

なお、玉産は明治維新前は聖護院宮御寺務代富士山別当池西坊正大先達浄蓮院の弟子となり、権大僧都法印となつて、明治維新以降神道を志している。

富士玉産の号は、書き残した文書や石造物より見ると、大正玉山、大正玉産、富士玉産と変化している。

(一) 丸岩講の組織
玉産は扶桑教が興つた時にその傘

下に入ったが、和田家文書「不二山會保志恵和御直傳寫」には「丸岩御中道開山講社」と記されていて、これは曾ての講社名と推定される。又、同家文書の明治二十七年(一八七六)の名簿には「神道扶桑教丸岩共濟講社」と表記されている。

文政三年以降の講社の地域的広がりを碑及び講社名簿に基づき調べた結果を次に示す。

(足柄上郡) 川村岸、川村山北、川村向原、塚原、岩原、沼田、三竹、栢山、駒形、壙下、小市、飯沢、谷峨、平山瀬戸、西大井、上大井、金子、金手、松田、神山、山田、篠窪、上菅我、柳、高尾、赤田、栃久保、菖蒲、柳川、八沢、川西、皆瀬川、市間、鍛冶屋敷、玄倉、都夫羅野、透間、内山、矢倉沢、吉田島、延沢、金井島、中之名、半分形、古怒田、鴨沢、雑色、松本、比奈窪、岩倉、境、境別所、久所、田中、遠藤

(足柄下郡) 北ノ窪、飯田岡、清水、堀之内、中曽根、桑原、西大友、成田、下堀、下大井、曾我原、小船、小竹、沼代、明沢、中村原、小八幡、国府津、

久野、荻窪、早川、大住郡 秦野町、首屋、今泉、平沢、尾尻、菩提、羽根、横野、上大槻、土屋、谷沢、落幡、真田、北金目、日向、寺田繩、上粕屋、板戸、大句、入山瀬、丸嶋、大畑、中原、西海地、小鍋嶋、東富岡、西富岡、真土、南原、八幡、堀、南矢名、小稲葉

(洵綾郡) 中里、山西、川匂、国府本郷、国府新宿(愛甲郡) 南毛利村、林村、煤ヶ谷

(他の県) 静岡県小山町、竹之下、所領、田方郡加野村、山梨県西八代郡、福島県信夫郡、飯高郡茅沢村、東京市本所

以上、足柄上・下郡 七六村、大住郡 三三村、洵綾郡 五村、愛甲郡 三村、その他 八村、計一二五村である。講社によつては時代の変遷と共に消長も見られるが、足柄上・下郡、東の大住郡、洵綾郡、愛甲郡方面に分布していることが判る。明治期の職員録には講社職員二百六十九名が記録されている。又、二十六条から成る講社規約が残っている。

(二) 丸岩講の先達
先達としては富士玉産の他に次の

先達が活躍した。和田喜右工門(岸)、津田数右工門(湯坂)、津田徳左工門(湯坂)、富士一郎(岸)、和田富士太郎(岸)、白井庄右衛門(皆瀬川)、瀬戸新太郎(山北)、石田又次郎(斑目)、二宮豊山(神山)、小岷徳山(吉田島)、内田喜兵衛(山田)、栗田文次郎(金手)、相田久米蔵(西大井)、鈴木大助(西大友)、鈴木茂三郎(成田)、村山吉太郎(桑原)、中嶋彦太郎(堀之内)、高橋元太郎(飯田岡)、古屋清右工門(塚原)、柳川籐左工門(北金目)、鈴野鳳吉(上大槻)、清水仙左衛門(今泉)、林林蔵(沼代)、山崎浪次郎(鴨沢)、小澤利兵衛(雑色)、諸星五郎兵衛(半分形)、相原吉五郎(中村境)、相原清右工門(中村久所)、池田喜兵衛(中里)、吉岡治次(南毛利)、水嶋忠次郎(林)、日下領道(林)。

以上のうち、和田喜右工門、津田数右工門、津田徳左工門は玉産が岸に定住する以前からの地元の前達であり、諸星五郎兵衛は丸岩講の最も古い碑がある半分形出身で、扶桑教以前の安政年間からの先達である。また、富士一郎は富士玉産の子である。一郎は明治二年生れで、十四才の時に御山修行之巻を、十七才の時お伝えを、十九才の時碑文などを書いている。玉産の血を受け継ぎ達筆であった。玉産没後に富士玉山と号した。明治三十六年早逝し中教正を贈られた。(続)

生かされて

私の軍隊体験(10)

磯部正人

タイシエット収容所

タイシエットはシベリア鉄道の通る街で、今まで居たグリコンや最初の収容所は此処タイシエットから北極の方へ遙か入った所だと思えます。タイシエット収容所は今までの収容所と違って旧日本軍の面影は全くなくて旧軍の階級などは全然関係なし。弁が立ち労働者階級としての階級意識が目覚めた人達がリーダーシップを取り収容所生活を牛耳っているような感じでした。我々のような所謂シベリヤぼけしたノロノロ人間は、只々きつい労働に就くだけでした。労働の種類は鉄道の枕木染色工場での材料運搬でした。

貨車に積み込まれてある白木の枕木を下ろし、これをトロッコに積みます。数台のトロッコに積み終りますと小さな機関車が工場内に入って来ます。やがてク

レゾールの中に漬けられ、真黒に染まった枕木が機関車に依って引き出されて来ます。この汚い枕木を肩にかついで枕木置場に井の字型に積み乾燥させます。この作業課程の中で私に課せられた仕事は枕木の積み下ろしでした。十人位で一組を作り、八時間交代の一日三交代制で二十四時間ぶっ通しで作業が続けられます。一週間で勤務時間がずれて行きます。朝八時から午後四時まで、午後四時から午前零時まで、午前零時から午前八時までの三交代制です。枕木は単線用と複線用があります。単線用と云ってもシベリヤ鉄道は広軌なので日本のよりはだいぶ長い。

勿論生木ですので非常に重く、肩当をして手鉤を枕木の下の方に打ち込み手鉤で引つ張り反動を利用しながら肩に乗せます。複線用は両端を二人でかかえ上げ、かつぐ人が真中に入つて肩に乗せ腰を伸ばしてかつぎ上げ、一歩一歩地面を踏みしめながら運びます。背骨がゴキゴキ音をたて背丈が縮むような気がします。重いものなんのつて今考えて見ても、よくもまあやったものだと思っております。

これもやつぱりノルマが課せられ一〇〇%達成を強制されるのです。白木の色は比較的綺麗ですが染色されたものは汚なくて一日の仕事を終ると衣服は勿論顔や手は油まみれになります。一週間もすると衣はテカテカ光り出し重くなりませんが、やぶれるまで洗濯なしで着ました。

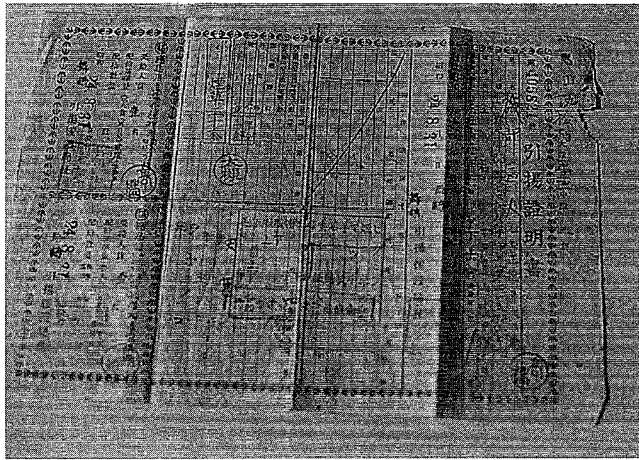
夜は、一応藁布団の上に横になれますが、熟睡は出来ませんでした。南京虫のためです。消灯時間までは皆の話し声がありますので、さすが南京虫も身の危険を動物的本能で感じているのか出てきませんが、灯りが消えてあたりが静かになると彼等の巣窟である柱と壁のすき間や柱の割れ目、又、天井板の隙間からポタポタと落ちて来てこの疲れ果てた人間の生血を容赦なく吸い取るのです。まさに小さな吸血鬼です。灯りを点けるとサツと逃げます。憎たらしいこの小さな鬼を時には押さえることがありますが、押し潰すと赤い血が飛び出ます。吸われた傷口がとも痒く大きな山蚊に食われたときと同じです。蚊は着物から出たところしか刺さないけれど、こいつはズボンやシャツの中まで入り込んで刺すので全く手の打ちようがありません。しかも一年を通じて出てきますので、どうしようもない。さすがに手強いこやつも夜明けが近付くと、さつさと自分の巣窟へ引き上げてしまふ。憎い事この上ないきやつらも今までのラーゲリには居なかつたのがせめてもの救いと思うべきか。日本でも戦前の港町には、よく居りました。私は門司で散々痛められた経験があります。勿論戦後は、蚤虱等も姿を消しましたので当然彼等も居なくなつただろうと確信しております。

こう言った無理が年老いてから膝関節症を患つたことと因果関係が大いにあるように思えてならないのです。四カ月余りの重労働で又もや体が痩せ衰えてまいりました。

約一カ月の勤務の後、待ちに待ち続け、そしてこの為に酷く辛い重労働にも耐えに耐えた内地帰還の順番が、どうやら巡つて来たのでした。

なお、タイシエットの収容所で三カ月ばかりの間、後の巨人軍監督になられた、故・水原 茂さんと床を並べた隣同志でした。彼は日本に帰つたら必ずプロ野球をやるんだと云っていました。私より一カ月早く内地帰還いたしました。

八月中旬、私も待ちに待った内地帰還のためナホトカに向けてシベリヤ鉄道を東進しました。二十年の十二月に西へ向けて貨物列車で送られた時の暗く悲しい希望のない気持ちとは裏腹でした。生きて帰れる喜びに満ち溢れた列車の旅でした。けれども、心の隅には、なお半信半疑の気持ちがあります。今まで騙されたことが余りにも多かつた



舞鶴港に上陸後、引揚援護局にて渡された引揚証明書。
こんな一枚の紙切れだけでも、私の人生の一駒を証
明する大事な物なんです。

からでしょうか。
でもこの不安は、ナホト
カに着いて日の丸の旗を立
てた輸送船を見て少しは和
ぎました。「恵山丸」とはっ
きり書かれた船名を見た為
でしょう。直ちに乗船し、
日本人の船員に「ほんとう
に日本へ帰れるのか」と聞
き「帰れますよ、確かに帰
れますよ」の返事を戴いて、
もう有頂天。ああうれしい。
九年ぶりに漸く祖国日本の
土を踏める。なんと長くき
つい九年の道程であったこ
とか。

親父やおふくろは生きて

いてくれるだろうか。兄
妹や親せきの人達、そして
友達も皆元気だろうか。兩
親は特に老齢だから、どう
か生きていて欲しい。何し
ろ大展子山の陣地構築頃か
ら四年余は、はがき一本や
りとりさえ出来ない状況
だったから、おたがいの安
否は判らないのだ。早く、
早く走れ恵山丸!!!

喜びに包まれて

夜明けと共に甲板に出て
見る。かすかに灰色に見え
る陸地。あれが夢にまで見
た内地か。だんだん近付い

てくるにつれて緑色に変わ
てくる。そして高い山がせ
り出した僅かの平地に舞鶴
の街がある。赤錆びた建物、
煙の出ない工場の煙突。ま
さに国敗れて山河あり。内
地も大変だったのだなあ。
色々な思いにふけりながら、
今度こそは本当に内地帰還
して舞鶴港に上陸の第一歩
を印したのであります。
時は昭和二十四年八月三十
一日。

昭和十六年の正月、入営
のため我が家を出てから八
年八月の月日が流れた。
何時でも好きな時に帰郷出
来る所に住む年月に較べ異
なつた異国での自由のない
軍隊生活に続く捕虜生活
は、私にとつて耐え難い長
い長い年月でありました。

復員列車から垣間見た京
都の街は未だしも、大阪駅
や駅前前の荒れ果てた焼跡、
赤錆びた鉄骨の残骸等を見
て物凄く悲しみと淋しさ
を覚えたのでした。若い頃住
んだ事のある街だし毎日大
阪駅の東側を通って淀屋橋
まで会社通いをして駅周辺
の賑やかさを知っていただ
けにショックが大きかった
のでしよう。

その日のうちに列車は厚

狭駅に着き下車したら、
ホームに三雄兄と白い服を
着た女の人が一緒に迎えに
来ていた。兄夫婦であった。

わざわざ出迎え有難う。そ
して正明市駅(現長門市駅)
まで迎えに来てくれたお母
さん有難う。腰が九十度曲
り、入営時には大女だった
母が小さくなり別人の様
だ。そして広中君兄弟あり
がとう。我が家の前の県道
までおとろえた足どりで一
生懸命に出迎えてくれたお
父さん有難う。唯今生きて
帰りました。親を思う心に
優る親心、この九年間特に
消息皆無の戦後の四年間の
苦しみは如何ばかりであつ
たろう。ご心配を掛けまし
た。

そして私が入営の時、見
送ってくれた久実兄と登兄
の死は、満洲で知つてはい
たが、やっぱり姿は無い。
淋しいなあ。無念だなあ。

昭和十六年一月、我が家
を出発するとき恐らく私は
生きて二度と故郷の土は踏
めないだろうと覚悟して家
を後にした。その私は幾度
となく死線を超えて生き永
らえて我が家へ帰って来た
のに、大丈夫と思つていた
二人の兄は戦病死或いは病

死して今は亡い。ままなら
ぬ浮世とつくづく感じたも
のでした。

帰国後丁度まる四十年が
過ぎた。家業を継ぐべき長
兄亡きあと、老父母と遺児
二人を守りながら義妹二人
と力を合せて農業をやつて
くれていた兄嫁と縁有つて
一緒になり、農業に従事す
る事満二十年、漸く中継ぎ
としての私の役目を終り、
家業の農業を若い者に譲つ
たのでした。

そうして飲食業界に身を
投じました。四十八歳の年
齢で全く未知の世界に入る
には大きな不安が先立ちま
した。しかしながらこの年
齢では他に適当な職も見つ
かりません。此処は乾坤一
擲勝負せざるを得ませんでした。幸いにして妻の献身
的な絶大な努力と母を始め
とする家族全員の理解ある
協力、地域社会の方々の厚
いご協力、それに終始可愛
がって育てて戴いた数多く
のお客様の御厚意に依つ
て、今日の私が生かされて
いることを感謝しながら、
老骨に鞭打って仕事に励ん
で居ります。

今まで通つて来た私の人
生を振り返つて見ますと所

謂積極型の方ではなくて、非常に引込思案な生き方をして来ました。でもそれは私の持つて生まれた性格の所為で致し方無いと思つて居ます。所謂なまくら人生を送つて来たのですが、しかし考えて見ると、あの戦乱の十年間この生き方が私を今日まで幾多の死線を越えさせてくれたのかも知れません。だから私は決して私の今までの人生を悔いてはいません。又、人生八十年の時代とか云われていますが、これから先も亦、恐らく今迄の生き方を変えることは無いだろうと思つて居ります。所謂地位とか金とか名誉とか何もない全く

のその日暮らしの私ですが、これとても別に苦にもなりませんし、何故もつと、と云つた悔いも有りません。今の現在のままの私で充分なのです。

昭和五十三年三月六日、午前一時五十分亡き母が息を引き取る直前に両手の親指の爪を擦り合せるような仕草を始めました。弱々しい仕草ですので、始め何だろう何が云いたいのだろうかと枕元につめていた皆で相談しましたが判りませんでした。

が、そのうちにマツチを擦れと云つて居るのだなと判りましたので、早速仏壇

にお灯明をあげますと今度は両手を合せて拝む仕草をします。皆仏壇の前に坐り、南無阿弥陀仏とお称名しますと、こくつとうなずき大きな息を吸いこんでお浄土に往生致しました。私は亡き母が今はの際まで導いてくれたお蔭で、それ以来機会ある毎に、良き伴侶である妻と共にお寺に参詣し、阿弥陀仏の御本願を聞かせて戴くことを最高の楽しみとする様になりました。

永い間流転輪廻を繰り返して参りました私が、幸にもこの人生を得て、尊い仏顔に会わせて戴きました事の有難さ。煩惱あるが仮に必ず救うと誓つて下さつ

ている阿弥陀様の大慈悲心を聞かさせて戴いて大きなやすらぎを戴き、この息絶えれば直ちに仏として永久の生命を与えられる有難さに、只々感謝報恩、お称名の声と共に明日をも知れない日々を生かされて生きて居ります今日此の頃です。

あとがき

筆をおろしてから大変手間どつてしまつた。何せ五十何年前の年月が経つて居るのだから、想いだそうと努めてみても、シベリア抑留によるボケも手伝つてか余程強烈なインパクトを受けた事以外は、はっきりとした年月日とか、場所とか、数量とかは、ほんやりとしか記憶に残つて居ない。

昭和十六年十二月八日は、開戦真珠湾攻撃のラジオによる放送を、ハルピンの歩兵第三十聯隊第十一中隊舎前に於いて銃剣術の錬磨に励んでいる最中に聞いたことは、はっきり覚えて居る。それ以来の悲惨な戦争のために幾百万の国民の尊い人命を失い、国は敗れ、戦場へ或いは原爆で、或いは空襲のために傷ついた多くの人は、今に至るも未

だ後遺症に悩みつづけて居られる。或いは、又敗戦後の混乱時に親が病死したり、生別れ等々色々な事情で中国東北部(旧満洲)に残された数多くの残留日本人孤児の悲しむべき問題も未解決である。

そして、五十七万余人の旧関東軍兵士がソ連の捕虜となり、数年の長きに亘つて強制労働の苦役を強いられ、云いつくせない程の塗炭の苦しみを舐め、はずかしめにも耐え、その上不幸にして病にたおれて生還出来なかつた数万の方々が居られる事は、私達ソ連に強制抑留された者にとつて一生忘れることは出来ない。そして外国では中国、韓国、アメリカ、英国、その他南方の諸外国の国民にどれだけ多数の犠牲者が出たかを考える時、戦争ほど罪深く悲惨で不幸で無駄なことはない。

酒匂川雑考三題 (続)

川瀬春雄

酒匂川の渡し場はどこにあったか

安藤廣重の東海道五十三次小田原の図は見た通り酒匂から写生したものである。ではその場所はどこであったか、今はコンクリートで立派な堤防が兩岸に築

かれ酒匂橋のあたりに立つて見ても往時の渡し場がどこであったか全く見当がつかない。

ところが意外、対岸の城東高校の校門の山側ガソリンスタンドの裏を四メートル幅程の道が堤防へと通じている。この途中には昔の

網一色部落の鎮守であろう神社がある。この事からみてもこの道が古い事を証明している。この道こそ往時の人々が歩いた渡し場への道であつた事が分かる。渡し場は、今の酒匂橋より百メートル程上手であつたのである。この兩岸こそ参勤交代の大名行列や一般人の客が渡し順番を待つて兩岸は賑わつたのであろう。

筆者住所
小田原酒匂二一三八一五六

如何なる理由があつても今後戦争は起こしてはならない。国民が挙つて戦争反対を叫んで行かなければならない。そして戦争の体験は私達で終りにしなければならぬことを切に痛感するものであります。(了)

赤い夕日が沈む(6)後編(2)

私のシベリア抑留生活Ⅱ

四 奥津錬成隊

退院患者をそのままラボリーターカーローナー(作業梯団)に送ると身体が馴れるまで直ぐに作業が出来ない場合もある。運のよい者は錬成隊に送られて身体を回復させてから作業梯団に送られる仕組になっている。

三月とはいえ非常に寒く、冬の期間病院で過ごしたのでひとしお寒さが身にしみ、奥津隊に行っても最初のうちはつらかった。此処では専ら身体の錬成が主目的で、午前、午後一回ずつ薪取りに行き、あとは炊事場や入浴場、兵舎、官舎の新切ぐらいの楽な作業であった。食事は捕虜の身では質量ともに十分であった。

此処で二週間の生活の後、身体検査があり(身体検査といっても目方を計るわけではなく、外観とお尻の肉を引っ張ってみて一、二、三級をき

木曾 正雄

める)、私は一級の身体となったので、作業梯団行きがきまり県大尉以下七〇名は三月二十三日(この日は私が東部七部隊に入隊した日である)出発シベリヤの奥地へ向った。

五 第三一九收容所

イズベストからやく一時間汽車に乗りクレゾールに着く。此処は支線の終点で、温泉があり、囚人や捕虜の外傷患者、骨折患者の療養所である。クレゾールの日本人捕虜收容所で一夜を明かした。此処の親切は大隊長のお陰で温かいお湯を飲み、携行の黒パンを食べて、ペチカもどんどん焚いてくれたので暖かく寝ることができた。朝食後トラックに

乗リテルマ、モシカ、ヤクドニヤを経て夕刻三一一收容所に着く。目下建設中の收容所で、営内作業と鉄道建設工事が主な作業であ

る。まだ作りかけの部屋に案内され、壁もなくペチカの薪が乏しかったので外套を着たまま寝た。

翌日は早速付近の道路作業に引きだされた。此処の收容所で北安の同じ中隊にいた関口上等兵に会ったが、給与が悪いため相当痩せていた。午後二時ごろ昼食に帰って来たとき急に転属命令が出て、此処に来た半数の者が三一二收容所に行くことになった。昼食をすませ、持ち物をまとめて出発したのは夕方、ソ側の歩哨が一人付いてきて、凍った川の上を四軒ばかり上流に向って歩き、三一二收容所に着いた。此処も建設中の收容所で暗くなって着いた為、ペチカを取付けたり薪を運んだりして夕食を食べたのは、大方午後九時を過ぎ、雑然とした部屋の床の上にごろ寝した。

次の日から我々のラボリーター(作業)が始まった。

收容所から河を隔てた、鉄道敷設のための、路盤上においてある邪魔な石を運搬する仕事である。河は水面から路上までは三〇メートル程の高さで、一方は河、一方は断崖となっているの

で、道路上の石を手でかかえて河の方へ運んだり、重い石は二、三人でころがしたりした。

四月に入ってから、シャベル、鶴嘴をふるって凍った崖山をくずし、ターチカという小さい一輪車に土砂をのせて運搬する作業を行った。朝、夕はスープと飯、昼は二五〇瓦の黒パンとスープで、飯といつても茶碗に一杯くらいの大豆かポーチミか青豆の焚いたものでスープの実は一〇粒くらいの豆が入っているほどの給与であったから身体がふらふらして、まともに仕事ができなかった。

四月中旬頃再び転属命令が下り、四〇軒ばかり奥の第三一九收容所に行った。第三一九收容所は、昭和二十一年(九翌)四月から翌年四月に至る一カ年の、私にとつても最も長い捕虜生活を送った收容所である。私が行った時はまだ外柵もなく、建物も三棟しかなかった。

戸室少尉が大隊長であったが、後に私より一、二週間遅れて到着した県大尉が大隊長となった。此処のソ側の職員は、我々

日本人同志が鼠と言っていたナチャニツク(所長)、うるさ型の若いポンポメーター(食糧被服の係)、プララップ(作業全般の係)の爺さんと称する人のよいそして世話好きの日直将校、女たらしのポンポツルート(事務係)等で、作業の監督として一人のドイツ人捕虜がプララップの助手をし、のちにナチャニツクの妻君となったマダムドクトル(女医)がいた。

余談になるが、このプララップは日本人捕虜を大事にし、作業にも理解があり、陰に陽に我々の味方となつて、ポンポメーターと意見が合わず、七月の朝突然銃声が聞こえたと思つたら、プララップは朱に染まって倒れ息を引き取った。おしい人を失い我々は心から彼の冥福を祈った。二人とも中尉で、プララップは常に軍服を着ていたが、ポンポメーターは平服で仕事をしていて、拳銃を身に付けていた。戦後捕虜の抑留地のシベリヤとはいえ、殺人を犯したポンポメーターが罪にならず、そのままこの地にいたもの不思議である。もつともこの辺は政治犯、殺人

犯、窃盗犯の島流しの地であり、ポンボメーターはナチャニツクの妻君となったマダムドクトルと、所長の目を盗んではデートをし、肉體關係まで発展したのに所長がだまっているのも不思議である。

収容所に着いたのは夕方近くであったが、ポンボメーターから一人一人持ち物検査を受け、夕食を終えて一服していると、カリエルに穴埋めに行けと命じられた。今日着いたばかりでもうノーチラポーター(夜間作業)である。我々三〇名の者は器材をもってトラックに乗った。ソ側の運転手が酔っている、真つすがな一本道ではあるが、トラックの進行が左右にまがって、はらはらさせられた。監督は黒んぼと称する色の黒い蒙古系のロシア人である。カリエルに着くと、穴は五個あったので、我々は六名ずつに分かれて作業に取り掛かった。曇天で手元がよく分からず寒さも加わって早速焚火をした。穴埋めが終わる次第、すぐ帰すと言われ皆は一生涯命やうたが、収容所に着いたのは夜の十二時を過ぎていた。

その後、カリエル作業が本格的になり、自動車道路の補修作業に、カリエルの井戸掘作業にだんだんとラポーターがきつくなつた。

五月になって鉄道敷設道路の路盤工事が始まり。昼夜二交替で二個小隊ずつ出勤し、我々は自動車の砂下ろしを専門にやつた。収容所からカリエルまでは四軒あり、深さ一〇メートル内外の井戸を掘り下げて爆薬をつめ、爆破した土砂を五人一組位になってトラックから下ろして、土砂をならし、路盤を作つてゆくのが我々の作業である。

カリエルのエスカトール(起重機)は間断なくうごき、一〇数台のトラックが次から次へと来るので非常に忙しかつた。この頃食糧は大豆ばかりであったが、量が多くなり、能率給与となつたので作業量の多いときは、パンや雑穀を増配してくれた。

五、六、七、八月は毎日しとしと雨が降り、被服はびしょぬれとなつて、作業を終えカローナーに帰つて来てから、ペチカで乾かし、まだ乾ききらないうちに翌日その被服を着て行かねば

ならない程であつた。雨降りの夜間作業のとき、火にあたっているとソ側の監督が来て、火を蹴散らしラポーター、ラポーターと言つて追いまくられた時は泣きかくなる程くやしかつた。

八月になってカリエルの井戸掘り作業になつた。縦横一、二メートル、深さ三メートル程の穴を二人ずつ組んで掘るのであるが、三〇糶も掘ると凍つた土が固い岩石でも掘るよう一日二〇〇三〇糶位しか掘れない時があり、土砂の搬出に間に合わせるため、穴掘りを急がせられ夜の十時、十一時頃まで作業をする。シベリヤの夏は薄暗くなるのが十時頃であるから毎日収容所に帰るのは、十一時、十二時となつて、それから点呼を受け夕食をすると寝るのが零時か午前一時頃となり、三時頃には夜が明け、六時起床では疲労と睡眠不足のため、昼間監督の目を盗んで昼寝をしなければ(昼寝といつても土の上にごろりと横になるだけである)身体がもたない。またこの頃、ヤカタとかフレップとか言うシベリヤ特有の葡萄のよいうな実があるのでこれを食

べたり、きのこや野草をとつて食べたりして腹の足しにした。毒茸を食べて中毒になつたり、尊い生命を落とした者もいる。二十三軒地点と称する収容所に行つて作業をしたのもこの頃であつた。十月頃伐採や筏流しと称する作業をした。シベリヤの小高い丘は森林が沢山あり、直径三〇〇五〇糶の立木を三人一組となつて伐採し、小枝をはらつて長さ十五メートル程の材木に切り、積もつた雪と傾斜した細い道を利用して搬出するのである。道狭く、足元悪く、勢いのついた木材を滑らせて搬出するので、動作を敏捷にしないと、転倒して怪我をする。

十一月十二月は色々な作業を行い、一日のうちでも、あちらこちらと引き廻された。この間、小隊長や監督等もちよいちよい変わり、ソ側の監督は交替する度に悪くなるような気がする。

十一月にはレール下ろしのノーチラポーター(夜間作業)が始まり、十二月になつてからは収容所の付近を流れる河に架ける鉄橋の橋材下ろし専門の作業となり、毎夜テルマ方面から運

んでくる大きな鉄材をトラックから下ろし、一晩に四、五台のトラックが来ると夕方から翌朝太陽が昇る頃まで作業が続き、十二時間以上の労働時間となつて、零下四〇度・五〇度の寒さに身体がだんだんと衰弱してきた。

昭和二十一年十二月鉄橋を作る足場を木材で組立、二十二年一月にはソ側の囚人と日本人捕虜の共同作業で、鉄橋はどんどん出来上がり、二月末には枕木やレールを敷いて鉄道が開通するようになった。我々が路盤工事を始めた頃は、土盛に相当の年月を要すると思つたのに鉄道が案外早く通るようになったので驚いた。

この当時我々は煙草の配給が全然なかつたので、煙草好きな者は、被服や満州から持ってきた色々な品物や砂糖と、煙草を囚人から交換した。

三月にはいつて鉄橋が完成したので足場を壊し、コンプレッサーを奥地へ送つて鉄橋付近の残務整理を行なつた。

十一月十二月のノーチラポーターで身体がだんだん痩せ、十二月には二級とな

り、翌二十二年三月には三級となつて管内作業をした。四月三日、鉄橋のそばの器材庫の整理に行き、午後より鍛工所で四人の鍛冶屋の向櫃を打っていた際、真つ赤に焼けたリベットの切れはしが、ズボンの左の内股の穴から入り、左足と尻と

右足とに大火傷をして帰営した。早速軍医の診断を受けたが相当の重傷で、翌日からは作業休となつて舎内に寝ていた。四月八日支部よりマダムドクトルが来て、体格検査の結果、オカ(虚弱者体格等位最も瘦せたもの)となり、火傷の傷がひどい

ためヤクドニヤの病院へ入院することになった。その夜マダムドクトルと三人の入院患者はトラックに乗せられ、次々と収容所からも入院患者を乗せ、途中三一六収容所に一泊し、九日昼頃ヤクドニヤの病院に着いた。(続)

終戦直後、地方新聞の誕生と戦い

『神静民報』功労者 近田茂芳氏に聞く(上)

植田博之

一 生い立ち

終戦後六ヶ月たった昭和二十一年(五〇〇)二月十一日、神静民報創刊の日です。私はその二カ月後に入社しました。創業者は田中要之助氏、神奈川新聞小田原支局長から独立、明治時代の足柄県だった地域、静岡県東部と、神奈川西部をテリトリーとして小田原を拠点として、新聞事業を起したのです。社屋は今の栄町、久保田床屋さんの近くにありました。

第一号は菊版二頁のザラ紙の週間新聞でした。その後、創刊号を懸賞金つきで探したんですが、現れず、

現存しているのは二号からです。

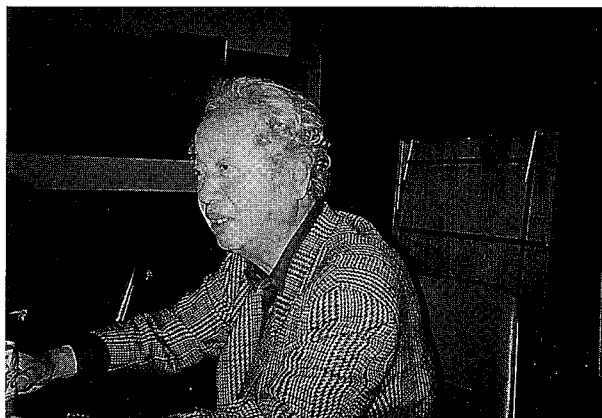
事務室は十畳ぐらいの一室、編集長の石田氏(創立者田中氏と神奈川新聞から一緒に創業に携わった人で、同盟、今の共同通信出身、記者は田中社長の助手をしていた庄司。鈴木、菊池(女性)の各氏が先輩、その後、私とほとんど同時期に入社した志沢、そして整理部長として満州から引き揚げて来た岩佐さんや遠藤、佐藤、土橋、加藤、秋山、北村の各氏とメンバーもだんだん増えて来ました。

創立半年ぐらいから、週間新聞も週二回の刊行となり隔日刊行、そして昭和二

十二年五月二十九日、タブロイド版ながら画期的な日刊紙として発足したのでした。この頃には社屋も駅前に移り、それまで印刷は足柄印刷(弘英印刷の前身)に依頼していたものを、すべて社内で作れるようになり、さらに記者も増えて行きました。

当初から、編集と営業が独立していて、広告せびりの、記事を書かなかつたのが、神静民報の良さとして今でも言われています。

近田氏は昭和十六年、開戦の年に、第一海軍燃料廠養成所に入り、二十年終戦まで応



少年時代から文学に夢をもっていたが、それに近い仕事が出るかもしれない。早速条件である論文「新聞記者に関する感想・抱負」三枚と、履歴書をもって、小田原へと向かった。編集長の石田さんに面接し、来てくれということになった。ようやく就職出来たのである。

二 紙の不足

用化学を学び、航空燃料の研究をしていた。研究室の仲間には、技術将校であった佐治敬三氏(後のサントリー社長)がいた。

終戦後、研究室の仲間には酔を作るのを手伝ってほしいと頼まれ、大阪市郊外の平郡にまで出かけたが、工場すら出来ておらず、鎌倉の実家に帰っていた。大船の駅で発刊間もない神静民報を売っていて、その中の記者募集の求人広告が目にとまった。

紙は新聞の命です。それが不足して戦時中より統制されていきました。神奈川県で配給を受けているのは神奈川新聞だけで、当時、約二万とか三万部の発行で、それ以上の部数の紙の配給を受けていました。残りの紙を売っただけで儲かる時代でした。

当神静民報は五千部の発行で紙の配給はなし、当然闇の紙を入手するか、仙花紙(紙屑の再生紙)も使わざるを得ませんでした。当時

宅配のほか、各社と同じく販売もしていましたが、売れ残ることに何の心配もありませんでした。包装用に魚屋、八百屋さんたちが喜んで買って行ってくれたからです。当時の紙は粗悪で、仙花紙などはポロポロになったり、真つ赤に変色して、およそ切り抜きなどは、数年しか読めませんでした。図書館にはマイクロフィルムがあるので救われています。

当初、静岡県東部は、熱海、伊東、沼津に支局を置いていましたが、安月給のため兼業の記者でした。しかしこの地方でも新聞の売れ残りはありませんでした。このような紙不足の状態は経営の進展にまで影響し、

神奈川県では一時、横浜、川崎を除いて、ほとんどの地域まで活動を展開していましたが、残念ながら、それ以上の発展は、望めませんでした。やはり紙の配給を受けている神奈川新聞とそうでない当社とのハンデイは大きかったといえます。

初期の印刷は戦時中の企業合同でスタートした足柄

印刷(初代社長 土屋秀男氏、弘英印刷の前身)の井細田(現・扇町二丁目)の工場です。

当然、時には紙の心配もしてもらっていたわけですが、当工場内の紙が不法な隠匿物資として、当時泣く子も黙るGHQによって摘発されてしまい、田中社長の指示で県庁裏の横浜第八軍司令部に行くはめになってしまいました。

言われたとおり、あの紙は当新聞社の新聞発行のためのもので、統制に関するものではないと、二世の通訳を通じ将校に説明しました。その後何の咎めもありませんでした。

GHQは連合国軍総司令部の意味で、東京丸の内、第一生命ビルに構え、当時の日本行政全般に目を光らせていた。この足柄印刷摘発事件前に、新聞担当の行政官、インボデン少佐がよく箱根に来ていた。

アメリカでは地方新聞の社長だが編集長をしていた彼は非常に当社を理解し、新聞の内

容にもよい印象をもっていたようである。また二十二年九月、報徳祭り、報徳精神を説き、二宮金次郎は民主主義のチャンピオンだと書いたものがあるらしい。

こんなことが無罪放免の理由かどうかはさだかではないが、ともかくマスコミには寛容な国柄ではあった。

近田氏はもう一度別件で、横浜の第八軍司令部に呼ばれている。大雄山、木材伐採事件である。誰かが売り飛ばしたらしいが、その事実を記者として問われている。枯れてしまったものを処理したことにして答弁、それも何のお咎め無しであった。

GHQの民間情報教育部は新聞の検閲をやっている。中央紙は事前検閲、地方紙は事後検閲、必ず印刷したら、送付することになっていました。しかし地方紙の場合は大して厳しくなく、一度、黒人の暴行事件の時に「黒い大きな男」と書いたのに、クレームが

付いた程度でした。

日刊スポーツの記事では、当日発行停止処分になったことがありました。二十四、五年頃には、ほとんどGHQを意識しなくなってきたでしたね。

三 地方紙の戦い

小田原を中心とし、神静民報のテリトリーとする地方紙は、戦中の企業合同によって新たに誕生したものの、新規参入したもの、など数多くあります。

古くは、足柄新聞明治五年(一八七二)、足柄県の官報のような役割を果たしていたようです。小田原大使女優の中村あずささんの曾祖父がやっておられました。

戦前には豆相新聞と東海新報があり、合併して相模合同新聞になりましたが、東海新報は昔の職安通りにありました。小田原新聞、昭和十年(一九三三)その後昭和二十一年再刊。神奈川新聞、昭和十五年(一九四〇)。そして神奈川新聞は、昭和十七年(一九四二)に県新聞と神奈川日日と相模合同新聞が企業合同して誕生したものです。

また、静岡県東部では、

沼津に二つの日刊紙、伊東には伊豆新聞(静岡新聞系)がありました。戦後、ビンメイ印刷は競輪新聞小田競の成功をバネに、神静民報を潰せの勢いで、日刊紙小田原市民新聞(四ページ)を発刊、しかし過剰投資で固定読者を確保できぬまま、一年で廃刊となってしまいました。

その他、県会議員の選挙がらみで、箱根の議員候補を中心とした勢力が後押しした新聞社を設立、日刊紙を発行し、これも選挙が終わり次第終息してしまいました。

選挙の時など、自分の事を一から十まで、よく書いてくれる新聞がほしくなるものらしいですね。神静民報も五十年近くになると、提灯新聞みたいなわけにはいかないでしょう。時には批判もする、そうなる神静民報の読者にたいして、離れて行くよう策略して攻撃を仕掛けてくる。しかし目的が選挙なら、選挙が終わればまた元に戻ってしまいます。読者はそういうものには二度とついていかないでしょう。

また新聞なんてそう簡単

に読者を確保できませんし、また儲かるものでもありませんから事業として、そう甘くはありません。

西の陣、東の陣

箱根山の西と東では経済圏も歴史、文化も違う。静岡県東部は地方紙の出番と思える地域ではあるが、本社を置いて活動していない神静民報にとっては苦戦続きであった。

また箱根から東は東京圏の厳しい地域ではあったが、しかし中央紙が地方版に多くのスペースを避けられない頃は、神奈川新聞と共生を保ってきた。馬入川を挟んで東の藤沢、茅ヶ崎は神奈川新聞が強く、西の平塚、小田原は神静民報が優位であった。湯河原などの人には神奈川新聞の存在は影が薄かった。現在では逆かも知れないが。

一時、神奈川新聞の編集局長川崎氏が神静民報の田中社長に頼みにきたことがあります。それは小田原の

支局長神保氏が亡くなって、記者が誰もいなくなつてしまつたからです。サツダネ(警察記事)と雑報だけでもいいから提供してくれ、ということでした。その後半年か一年、神静民報の編集担当の佐藤氏がそれを神奈川新聞に送り続けました。

これも、神静民報社長田中要之助氏が神奈川新聞出身であり、同紙常務(後、専務)の栖原氏と前身の横須賀日日からの朋友であつたこともあります。

栖原氏はよくこう言つたそうです、「馬入川、以西は攻めるな」。

それは古きよき時代の話で、その後今日まで、東京圏内は大新聞の影響をまともに受けながら、この地域で、戦つてきたのは、並みの努力ではなかつたであらう。

今、神静民報が五十年経つてこられたのは、箱根・小田原を愛し、創立時の夢を貫いてきた田中要之助氏の情熱と新聞記者出身の小田原市長鈴木十郎氏

の後押しのお陰であるう。(上) おわり

文命堤散策

宝永丁亥有富嶽

大噴火一噴烟乗西

風一焼砂熱灰飛三関

八洲一埋二武相河

川田畝一

被害甚大 為而酒匂

川遭二屢屢氾濫之厄一

相洲藩主自藩復旧

不可

願二幕府一為三天領一

享保丙午田中丘隅

依二幕命一大口岩流瀨

東西之堤膺修築一

祈願二神禹一日夜研尋

案二蛇籠之工法一

春秋二十成堤

植レ以ニ松植一

呼ニ文命之堤一
方今足柄平野豊穰將

而丘隅一族之功也

以堤上建二石喝一

厥恩惠於有レ讚二千

載一

波臣躍躍 戲二清漣一

葦荻舊酒匂川

曾窘二樞夫享保世

丘隅盛レ塊氾年

研尋日夜案二蛇籠一

水堰分流 計二萬全一

狡官衙商 匡二不徳一

誠心二秩勞知レ天

田騰 散策 望二蓮岳一

文命堤頭苔喝邊

並樹烟霧 鳩鷺 舍

護レ塘為レ景黒松 奸

平成十年二月

川瀬鳳山

宝永丁亥一宝永四年(七〇四)

田畝一田畑

享保丙午一享保十一年(七二六)

田中丘隅一江戸中期(一六六三)

「七元」の農政家、「民間省

要」を著す。多摩川、酒匂

川の治水に功あり(丘隅なき

あと一族治水に膺)

神禹一治水の神(黄河の水害

を除きし中国夏王朝の始祖)

研尋一十分に調べ研究する

方今一現在

蛇籠一籠に石をつめた治水

工法(ジャカゴ)

石喝一石碑(平なものを碑、

丸いものが喝)

波臣一魚類 躍躍一喜びは

ねるさま

漣一さざ波 葦荻一アシと

オギ(水辺の草)

舊備一青靑と茂るさま 樞

夫一農民

塊一土のかたまり 水堰一

水をセキ止めるセギ 案一

考えを出す 狡官一悪賢こ

い役人 衙商一詐欺的悪徳

商人(いつの世にも賄を取る

役人。不正工事を行う業者が

いる) 二秩一二十年 勞一

功 田騰一田のあぜ路 散

策一そぞろ歩き 蓮岳一富

士山の別名 並樹一なみ木

霧一霧 鳩鷺一ハトとサギ

塘一堤(土手) 苔一コケ

奸一美しい

『小田原合戦に亡くなつた横尾金助の供養に母が架橋』

名古屋の裁断橋遺跡

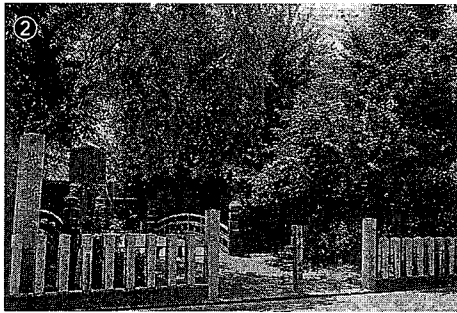
岩本宜明

熱田区伝馬四丁目の旧精進川に架かつていた橋に裁断橋と云うのがあった。小田原に縁のある橋であったが、精進川が昭和元年(一九二六)埋め立てられた際に橋も廃止された。その西裾にあった姥堂は、元地に三分

の一に縮小して建てられていたが、更に最近、道路拡張と共に姿を一新して、遺跡はほとんど一部残るだけで、全部二階建ての鉄筋コンクリート造りとなり、昔の面影は全くない。姥堂は二階の上に鉄骨の

建物として祀られ、旧橋桁等の一部は下の狭い境内にほんの少しが保存されているのみである。注意してみないと遺跡であることが判らない。小田原に縁がある橋の案内板には次のように記されている。

- ①平成10年1月29日見学
- ②昭和28年3月移設の姥堂
- ③昭和28年3月移設の擬宝珠(現在は市の博物館にあり)



なお、堀尾氏は江戸時代初期、出雲国松江藩主。その祖は天武天皇から出ていると伝えられる名族で、吉晴のとき織田信長、豊臣秀

(原文は平仮名が多いので読みやすく漢字混じりに改めている)

天正十八年二月十八日の小田原に御陣、堀尾金助と申す十八に成りたる子を發たせてよりまた、ふた目とも見ざる悲しさのあまり、今この橋を架けるなり。母の身には落涙ともなり、即身成仏し給え。逸巖世俊(戒名)と後の世の又後まで、この書付を見る人は念仏申給えや、三十三年の供養なり。



親の嘆きは、時のたつと共に深まるばかりで、元和八年(一六三三)金助の三十三回忌に、老母は金助の冥福を

吉晴が国政をたすけた。慶長十三年(一六二八)三男氏安が松江で没した。

吉に仕えて功をたてる。男金助は、十八歳のとき、天正十八年(一五九〇)二月十八日の小田原攻めに出陣したが、同年六月陣中で没した。吉晴はその後徳川家康に仕え功あり、松江藩主となった。慶長六年(一六〇二)、家督を次男の忠氏に譲ったが、忠氏は同九年(一六〇四)病没した。後を継ぐ忠氏の子忠晴が六歳の幼少なため吉晴が国政をたすけた。

子を感じる心情は、擬宝珠に刻まれ、母の悲しみと愛情の深さの上に三十三年で御家断絶となる悲惨さが加わり三百有余年たった今日でも、なお人の心を打ち語り継がれている美しい姿ではないだろうか。

更に、忠晴には子供がなく、臨終に際し家名存続を哀願したが、嗣子がなため、松江藩主堀尾家は、寛永十年(一六三三)御家断絶となってしまった。

祈って、往來のはげしく老朽化していた裁断橋二回目の架け替えを願いでた。しかし、金助の母は橋の完成を待たず他界した。御家断絶となつてしまつた。

- ⑤地元の説明(昭和57年11月・左端故・立木望隆氏)
- ⑥現在の姥堂

東満
国境 小豆山の死闘 (6)

捕らえられて

松本 茂雄

コムソモリスク第二収容所

収容所は馬小屋を改造したバラック同然のもので、ソ連と闘ったドイツ兵は無期、日本兵は二十年の懲罰労働が課せられると云う噂が流れた。

私は身も心も、もう何も残っていない程疲れていた。服装は乞食のような夏の姿だった。着いた最初の夜に、落胆した多数の日本兵が首を吊って自殺した。

翌日から早くも凍土を掘る作業に駆り出された。しかし、戦場で受けた外傷が次第に悪化していた。左の足首から股まで、膿んで丸太のようになつた。遂には膝のあたりから、ひとりりで膿が吹き出した。もう独りでは歩けなかつた。それでも何日か野外作業に出なければならなかつた。

翌年の一月、やっと入院と決つた。収容所内の病棟の一室で、大勢の者が私の体を押えてくれた。麻酔薬もメスもなく、煮沸消毒した鉄の先を膿の吹き出ている膝の穴に突き刺して、肉を大きく切つて捨てた。膿と血が洗面器のような容器一杯に出た。

それから、細かく切つたガーゼを黄色いリバノール液に浸して、傷口から中へ何本も押し込んだ。そこで私は氣を失つてしまった。氣が付くと、私は板を打ちつけただけの二段ベットに寝かされていた。次の日からは、例のガーゼを取り替えるだけの治療が続いた。

病棟では重病患者が多かつた。毎日多くの者が死んだ。お互いに、どの誰かも知らなかつた。或る日ベッドの上から下を見ると、下の段に寝かされている重病兵

が息を引き取りそうである。誰かが衛生兵を呼びに行つた。

私は急いで上の段から下りるや、その兵に合掌した。彼はメガネをかけて、最後の時が迫っていた。私は彼のメガネを外し、それを持つて上の段に駆けこんだ。衛生兵が駆けつけるとは、同時に彼は息を引き取つた。

私はそつとそのメガネをかけて見た。室内がはつきり見える。満洲でメガネを壊してしまつた近眼の私は、不便と言うより、大変危険なことも多かつた。亡くなつた名も知らぬ兵から、無断ではあつたが眼鏡を譲り受け、どんなに助かつたか分からない。片方の柄は欠けていたので紐をつけ耳にかけた。

そのメガネのお陰で三年余の労働もやり抜き、ソ連人からは「アチキー・サルグード」(めがねの兵隊)と呼ばれていたのである。病棟で死んだ名も知らぬあの兵に感謝して、冥福を祈っている。

病棟では重病患者が毎日多く死んだ。衣服を脱がせ、裸にして外に並べさせた。零

下三十度・四十度の中で、かちかちに凍つた死体を作業班がトラックに積み上げた。ゴトン・ゴトンと云う音が耳に残っている。死体は穴掘り作業班が掘つた大きな穴の中に、二十人、三十人と投げ入れられたのであつた。

私が入院して七十日も経つた時、傷口の肉は盛り上つていた。診察したソ連の女性軍医ドクシキリヒシキは私の足を見て、ひとこと「ダバイ・ラボート」(作業に出なさい)と言つた。退院である。

今、私の左の膝の下に、それらしい跡が残っているが、その時の痛みはもう思い出せない。唯、それを証する一枚の小さな紙きれがあるだけである。

乙主款第三三一八七号

松本茂雄

右傷痕軍人タルコトラ

証ス

昭和三十一年

六月二十九日

厚生省

は、鹵獲したドイツの戦車が山積みになつているのを見た。溶鉱炉の耐火煉瓦の修理作業では、冷え切らない平炉の中に水を被つて入れられた。

次にアセゼ自動車修理工場の建設現場で働き、ザコツゼルノー糧秣倉庫で働いた。海のように広いアムール川では、四十キロの麻袋を一人百個づつ船積みする夜勤を続けたこともあつた。

最も長かつたのは、カテージ住宅の建築現場で、主に煉瓦積みの手伝いをした。労働勲章をもらった中年の熟練工と二ーナと言う十五〜六歳の色白の女の子と私がクルーを組んで働くことが多かつた。

コムソモリスクの私の居た第二収容所には大勢の日本軍捕虜が入っていた。二年目から最初に「友の会」が始まり、次第に内部の反軍闘争に発展し、組織的な民主化運動へと激しく広がつていった。

果てしなく続く大地わが祖国よ
自由と平和の歌、海に山

に満ちて
ソ連の労働歌が収容所の中でも歌われ、沸き返つた。

やり場のない辛さや苦しみに怒りが、アジとなつて、旗を高く掲げよ！と叫び渦をまいた。

私は中隊の青年行動隊の文化部長になつて、杉田准尉の発行する壁新聞「赤黎」を無類にも階級的ブルジョア主義を批判し、自ら別に壁新聞「十字嶽」の編集発行をはじめた。そして十八地区に在る収容所の壁新聞コンクールに入賞した。続いて豆新聞の発行にも手を着けた。

その頃、萬国赤十字社を通じて日本に葉書が出せるようになった。当時私が出した五枚が、今手許に残っている。ロシヤ語と日本語で浮虜用郵便葉書と書かれた茶色の紙に、ソ連と赤十字のマークが赤く捺印されている。字は全て片仮名で、文面は「元氣デイマス」としか書くことは許されなかった。

また、もうひとつ、当時放送されたものが葉書で残っている。

「元氣です、ご安心下さい。……皆様に宜敷く」
松本茂雄さんよりお父さ

んへ。右は二月五日午後四時三十分、モスクワからのラジオ放送で……聞き取ったま、お知らせ申上げるものです。

秋田県十文字町
日本共産党十文字細
胞事務所

シベリヤにも遅い春は訪れる。そして夏が来て、秋が来て、厳しい長い三度の冬を越しながら、強制的肉体労働が続いた。無数の肉と空腹続きの極度に苦しい捕虜生活であった。

「帰りたい。日本に帰りたい。」
「何時、帰すのか？」
と警戒兵に尋ねる毎日であった。返事は決まっていた。「知らない。でも近々だろう」

そして、足掛け四年経った或る日、突然、本当に帰国の命令が出た。遂に出た。身の廻りの物を持つだけ

で、翌日には貨車に乗せられた。貨車に乗る時、誰か「ニーナが近くで仕事をしていると言った。しかし彼女らしい人影をちらと見たような気がした」だけであった。

帰国

コムソモリスクからナホトカに着いて、恵山丸と云う復員船に乗り、とうとう、舞鶴に帰って来た。湾の奥深く錨を下した船上で手続があり一泊した。私は何かを自分に課し、生きて帰れた自分に「けり」をつけたければ居られない気持だった。シベリヤから持って来た刻み煙草の包みを全部海に捨てた。もう、一生の間、煙草はやめようと心に決めた。

翌朝、陸の方から小さな舟が近づいて来た。舟には医師と二人の看護婦が乗っていた。甲板の手摺りを握りしめて鈴なりに集った復員兵の中に混って私も見下ろしていた。白衣の白さが痛い様に目に入った。

「とうとう帰って来た」
「とうとう内地に帰って来た」
私はいつ迄もいつ迄も立ち続けていた。感動が波のように胸を押し上げてくる

のであった。

引揚業務が終り、私は復員列車で舞鶴を發つた。夜行列車の車中で、私は名前を呼ばれたような気がして目を覚めた。入って来た一人の女性が私に飛び付いて来た。それは、私の入隊後に彦根に嫁いだ下の姉であった。復員列車が駅を通る度に、私が乗っていないかと探し続けていたのだった。

嬉しかった。列車のトイレの前の薄暗い通路で二人で向い合った。四年振りである。その時、あの上の姉がもう二年も前に亡くなっていたことを、初めて知らされたのであった。

上の姉は、小さい時に母を亡くした私達にとっては特に大事な存在であった。戦時下の配給食料も自分は食わずに、その分を私たち弟に分けるような人であった。私にとっては、菩薩のような慈愛の心を持った女性であった。

四年前、私が郷里の福島を發つたのは何十年振りと言う大雪の朝だった。見送

る人の波と軍歌や万歳にわき返る中を列車は動き出した。しかし機関車がスリッパして、ホームの端で停って仕舞った。

その時、列車を追って一緒に走って来た上の姉が私に向って言った。「きつと、帰って来るのよ。い、わね」
差し出した姉の手を窓から大きく乗り出して固く握った。姉の目から涙が流れるのを見て、私は胸が詰まった。

勤勞奉國隊のズボンに、分厚い黒の上衣を着た姉の、握りしめた白い手が氷のように冷たかった。ホームの一番外れに立つて、ハンカチを烈しく振って私を見送っていた。あの朝のことを、私ははつきりと覚えている。

その姉が、もう居なかった。どうして? どうして私が帰るのを待っていてくれなかったのだろうか。
熱いものが込み上げて、そして体が震えた。あれ程、あれ程、耐えて、耐えて生きて帰ったのに。私を待っていたのは、私の為に姉が書き残した四冊の「随想」だけであった。

(続)

東欧四方国を旅して

西野 明

今年の春、東欧四方国のツアーに参加してみた。泊まったホテルは、プラハ、ブラチスラバ、ブダペスト、ウィーンの四個所であった。朝食は、バイキング方式で何も改めて記す必要のないほどに一般化している。しかし、十数年前には、ヨーロッパでは、朝食は簡単なもので、いわゆる大陸的とよばれていて、卵は特に注文する必要があったことを考えると、隔世の感が

魅せられるチェコの首都プラハ



魅せられるチェコの首都プラハ
 型の石鹸が置いてある。一回の入浴では使い切れなく残すことになり、いつも勿体ない感じがするが、今回とまったプラハのホテルでは、石鹸が置いてなかった。石鹸を置く台に代わってシャンプーを入れたプラスチックの容器が取り付けられていた。どうして使うのかいろいろ試してみると、容器の真ん中を押

してみた。するとシャンプー液が出た。これは極めて経済的である。やがて多くのホテルにも普及するようになるのではないかと考えた。

ホテルは以前と代わったことはまだある。泊まったプラハを除くホテル三個所とも枕元にチヨコレートの一個が置いてあった。

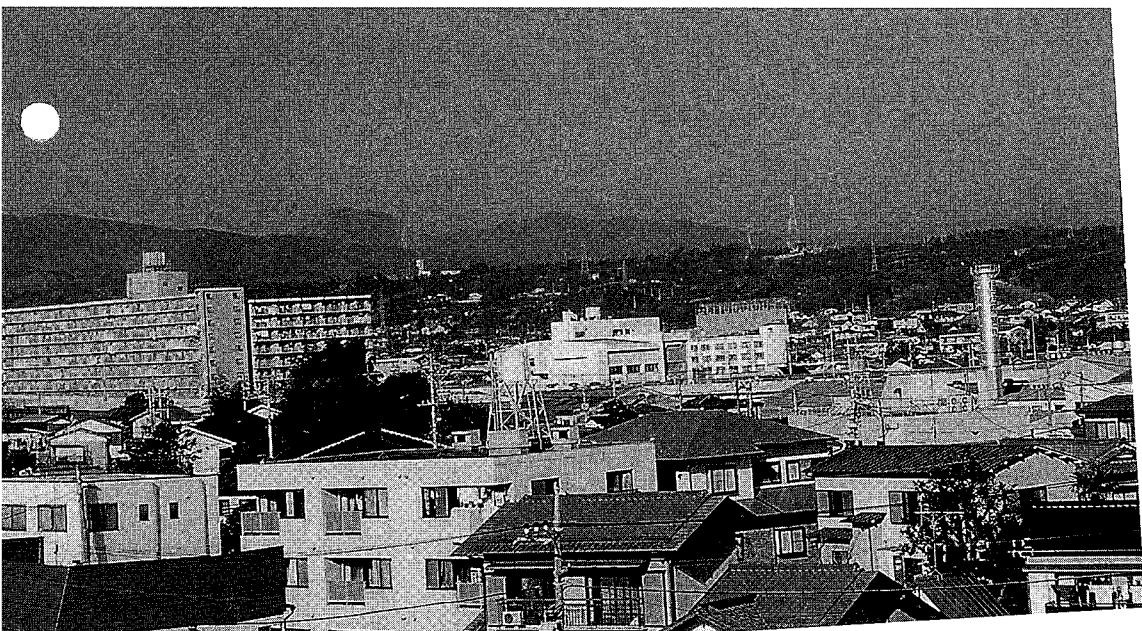
しかし、以前には見受けなかったことではないのか。家内は、きっと日本の宿が客のために菓子とお茶を出すサービスを見習ったのではないかという。

念のため女子添乗員に聞いてみると、必ずしも総てのホテルがそうしているわけではない。場所によって違うという。だが、添乗員の経験は五年と云うから、それ以前のことは知らないではないかと思われる。

最後のオーストリアのホテルでは、日本の旅館で来客のためにお茶と菓子と湯沸かしポットが置かれていたように、コーヒーや紅茶と旅行用の大型の湯沸器が置かれていた。この方式を欧米のホテルでも採用するようになったら面白いと思う。

荻窪・久野方面を望む

小田原市庁舎より



丹沢の植物

③6

城川四郎きがわしろう

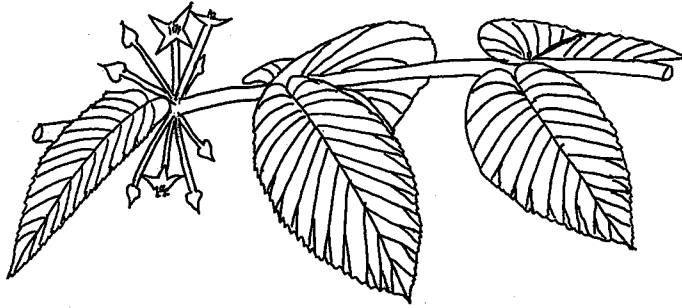
植物によっては、その分布域がひどく偏っているものがある。日本中で箱根だけしか生えていないコオト

ギリとか、丹沢だけにしか分布しないサガミジョウロウホトトギスのような極端なものから、富士火山帯周

辺だけ分布するハコネコマツツジや関東地方以西の太平洋側だけに分布するヒメシヤラなど、住みつく地域にひどくこだわっているように見えるものが少なくない。一般的な温度や湿度の条件によるものではなく、地球の歴史(地史)に深くかかわっているようである。

ここにご紹介するクロカンバという植物は本州、四国、九州に広く分布しているが個体数の少ないやや稀な種類である。神奈川県内では丹沢に限って分布し、箱根では記録がない。丹沢でも全域に見られるわけではなく西丹沢に偏り、個体数は少ない。分布の様子が興味深いので、美しい花を咲かせることもなく、めだつた樹の姿でもなく、はなはだ地味ではあるが、植物の研究仲間には注目されている存在である。岩の多い山地に生える落葉低木で、葉は対生して着き、葉脈が平行して走る。六月頃、黄緑色の小さな花を葉腋に束生し、秋に径一センチ足らずの卵状球形の実が黒く熟する。

クロカンバ (くろうめもどき科)
Rhamnus costata

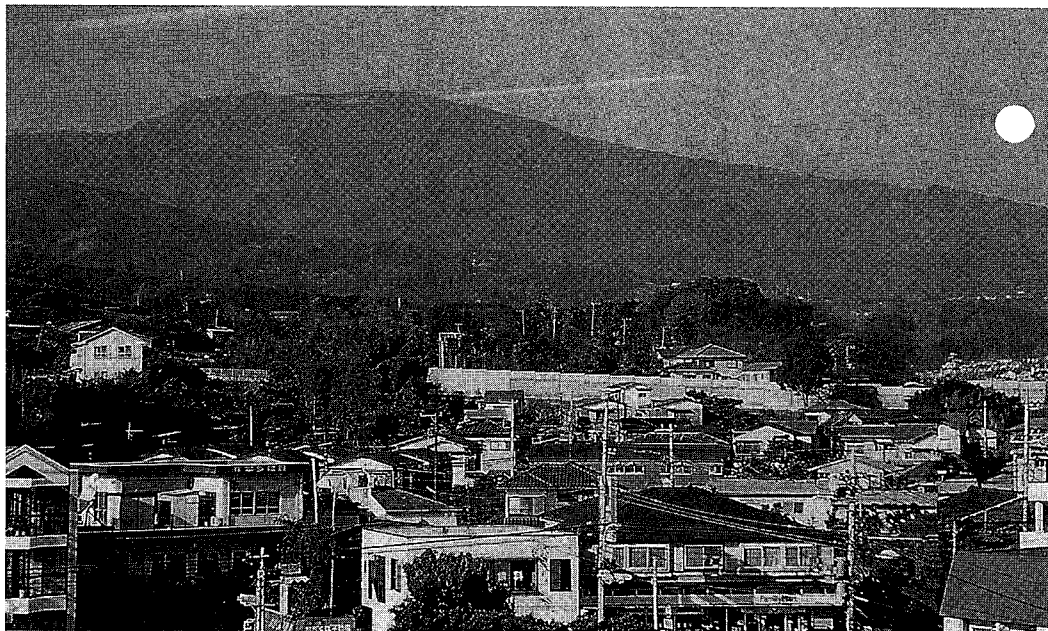


筆者原図

お知らせ

・七月二十一日(火)に山北方面の史跡巡りを予定しております。講師は、山北町教育委員長・同文化財保

護委員長の藤井良晃氏です。河村城址を中心としたもので、山北駅集合、弁当持参・小雨決行です。参加費無料。紙面の都合で「紅蓮洞・坂本易徳」は休載します。



仏師蓮池左内の注文状

内田 清

十王等の注文の様子

写真版は寛延三年(一七五〇)に小田原高梨町の蓮池左内が川村向原(山北町)の花蔵院から請負った仏像等の補修注文状である。「注文」はある事柄についての要件を列記した文書のことであるが、この場合は請負い契約書であり、品種・数量・形状・価格等が明記されている。

注文的要点を解説すると、

- ①十王(冥界にあって亡者の罪業を裁断する秦広王「初七日」初江王「二七日」宗帝王「三七日」五官王「四七日」閻魔王「五七日」等)十牀(体)。
- ②しやうづかわのうば(三途河の姥、または脱衣婆といひ、三途河のほとり、亡者の着物を奪い取る鬼婆のことだが、俗信では、咳・歯痛・子育てなどに靈験ありとされた)。
- ③びんづる(賓頭盧尊者・十六羅漢の第一尊者で、独立して食堂等に安置されたが、病患ある者がこれをさすると平癒すると信じられた)。
- ④九性(生)神(インド神話を受けた仏教の神。人が生まれた時からその両肩の上にあつて、その人の善悪・所行を記録するという。俗に閻魔王

の側で罪人を訊問し記録する神とされた)。

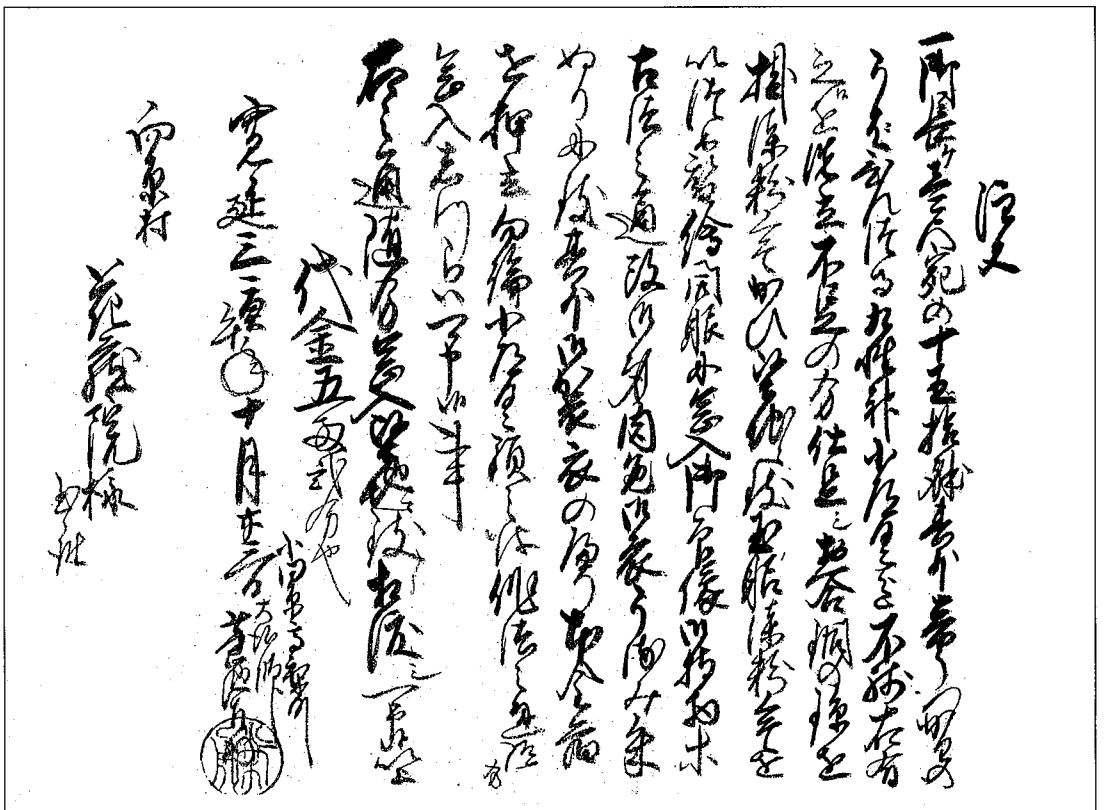
以上十三体の像と小道具の修繕は、洗いと欠損部の作り直し、銅のカスガイを懸け、玉眼の漆粉くそでの詰め替え、持ち物を古法どおりに改めること、体や衣の色彩・袈裟の扁(縁)の金箔押し、小道具類も作法どおりに念を入れて飾り整えると記された。

花蔵院の十王堂

花蔵院は真言宗清栄山十林寺と号し、明應元年(一四九二)中興だが、富士山宝永噴火後の被害を受けて正徳二年(一七二二)現在地の後ろに移転し、展望の良さから田中休愚の文命堤工事の宿となった。古くから十王堂があり、天保五年(一八三五)の記録で「地藏尊並十王一色(式)再興隨應代」とある事から前述の十王や賓頭盧尊者等と地藏尊が堂内にあった事がわかる。現在は堂が無く、本堂内左手に地藏尊を中心にして安置されている。

仏師蓮池左内と花蔵院隨應

小田原市史編纂室の『小田原の仏像銘文集』によると、蓮池左内は宝



永四年(一七五七)から一五〇余年間小田原に住んだ、小田原を代表する仏師であり、その活動は、寒川・海老名・秦野・南足柄という広範囲に及び、二六体以上の仏像等に名を残している(花蔵院分は含まない)。

勿論何代かに亘って同名が襲名されたわけであるが、花蔵院隨應の

注文を受けた左内は、花蔵院に五点の文書と銘板一点以上を残している(註1)。

随應と左内との関わりは、十王等の注文の前年一月二十八日の「注文」から確実に始まっている。この時は不動三尊を「極彩色」で、弘法大師座像を伊豆山流に作り直し、大師台座や不動尊火炎を新調するなど代金六兩三分、手付金三兩で請負った。この仕事は、左内が丁度一カ月後に達成した国府津宝金剛寺の不動三尊(現在県指定文化財)の修理・火炎新調に引き続きのため、立派な出来栄えて随應の信頼を得たらしい。

続いて写真版の「注文」。更に高さ六寸五分の小型不動三尊修理の一兩二分の「注文」。翌寛延四年の三尊立木爪(ツゲ?)厨子等一兩三分の「注文」。年月・代金不明の地藏尊修理「注文」が続くのである。

蓮池左内は結局、花蔵院で十八体、代金十五兩二分以上の仏像等を三年に亘って改装・補修したわけであるが、礼盤という住職が本尊の前で礼拝祈祷をする台の塗りや金箔押しなども行っている。花蔵院は小田原仏師の歴史発掘上の宝庫であろう。

ところで随應和尚は、天保六年(三三三)の記録でみると、前述の仏像の他に阿弥陀如来も修理しているし、護摩壇新調や十二天などの軸の修補、醤油や納豆の仕込み桶ほか家具・農具の新調、元境内の新田開発、山林買入れなど花蔵院中興の業績を挙げ

ている。その実態解明は「壇中七軒、祈願百八十二軒」という明治二年の記録がヒントになる。十王堂に集まり・護摩祈祷に随喜する信者を集めた十一世随應の宗教活動の解明が今後の課題となろう。

注意してほしい語句

仏教関係語が多く解説に苦勞し、住職藤井良晃師に仏像拜見等お世話になって見当をつけたりした。この後も修理されたらしく「注文」との不一致もあって未解決部分も多い。それはそれで残す事にする。

A 桐の皮を掛

どうのカスガイをかけ 度々でる字句だが、カスガイは金偏に糸で、鋸としても用られる国字らしいが文脈からも実物からも「かけがね」や「両者の間をつなぎとめるもの」では無いので、不明字句とする。

B 巾を俵ツボにおぼ

ごいんぞうおんもちもの 仏像の持物と判を捺したように形がはつきりと現れることらしいが、像の文字のくずしにやや難点があり問題を残す。

C



おだわらたなかしちよう・たいぶつ

注文

一 御長ケ耆尺宛の十王拾躰、其外志やうつか王の

うば、びん徒る、九性神、小道具迄、不_レ残右有_レ

之候を、洗立、不足の分、仕足_シ、惣合銅の銚を

掛、漆粉くそかひ堅地ニ致、玉眼ハ漆粉くそを

以てつめ替、絵開眼に念入、御印像、御持物等

古法之通改、御身肉色、御衣うまみ朱

ぬりに致、其外御袈裟の扁り、本金箔

を押立、勿論小道具類之儀、作法之通随分

念入しつらい可_レ申候事

右之通随分念入堅地ニ致、相渡シ可_レ申候、以上

代金五兩貳分也

(一七五〇)

寛延三庚午年十月廿三日

大仏師

小田原高梨町

蓮池左内印

向原村

花蔵院様

玉座

し・はすいけさない 初期には青物町に住んでいたらしい。文字が縦長に崩されているが蓮池左内である。

註1 青木友吉「私の早川村誌」に享保十八年の蓮池左内の文書が挙げられているが、現在の花蔵院文書にないので外してある。

(続)

震災日記

13

12

片岡永左衛門

大正十三年

一月

廿二日 晴

村川と云う人、大蓮寺借地の件で来談。

今日欠勤して板壁の手張りに一日をくらしした。

昨年九月三日に丸太繩からげにて、土丹葺きの堀立小屋を清吉に命じて一族二十余人ともかく雨露を凌ぎ得て、是で追い追ひ炊事場、湯殿を古材にて取り付け、寒冷となりたれば、防寒の設備に取り掛かりたるも、元より素人にて只器用と云う迄なれば、手間の懸るも職人不足の折から止むを得ず、然るに同人も熱誠にならず、漸く昨夜より室内に寒風吹き入れぬ迄になり、一同大喜び。此の清吉の親は久野の者にて、不幸続き妻を失い借財の為、宅地家屋も人手に渡し町奉公をなし居るを、世話する者あり雇入れたが、酒も煙草も吞まず、温和にて誠実に働き、給金にて身代限りをなしての残

りたる借財を皆納し、是にて大手を振り世間に出られると喜びしは、拙宅に来たりて三年月にて郷里に墓参りに行きたり。式十年も勤続し清吉に嫁を迎え古家を求めて一家をなしてよりは毎日通勤し、其の死亡後は清吉の又々出入りし、最早是も十二年殆ど毎日来たり父に劣らず、誠実にて従来出入りの職人も面も出さざる此の際に、他に比して人の不自由を感じざるは、親子のお蔭なりと家内中折りに触れ云い合えり。

今日も知人、未知の人より賀状、少し迷惑なり。

廿三日 晴風

震災後は井水に不自由と聞くも、自宅は不自由せざりしに、俄に水量を減じ其の水も濁水にて呑用に堪えず。近傍も井水は以前より減少にて充分に汲みを得ず。板橋地藏尊に細君参詣、両人の為に(註)震災で亡くなった孫 施餓きす。

慰問品毛布新旧式枚配給せらる。是までは焼失者已に多く配給し、此の方には行き渡らざりしに、猶慰問品も送付あり。今度は全半潰にも総て配付となる。近頃は、被害人は貰う事になれ、今は夫程に有り難味を感じざるようなれば、我々迄も寝具の配給を受くるを恐れ入れり。

世の中の厚き恵みの数ぞひて寒むき飯屋も春を知るらむ

阿部潤三氏の談に、九月初旬、慰問品募集の為に当警察署の証明を持ち、大阪に至り朝日新聞、毎日新聞両社に申し込みしも、京浜に遺贈の約束にて他の地方に供給に應じ難く、然れども一府七県連合の救済組織昨日成立したれば、此の方に交渉をと新聞社員と府警察部に交渉せしに、是より

内務部長と知事の同情を得、承諾有りしも運搬船に差し支え、府より諸々に交渉し、三菱の三瓶山丸と決したるも、積量の都合にて鎌倉と小田原の分を同船にする事となり、物資の内、奈良県分米の千五百俵は当

郡中、其の他府県の食料品中、慰問袋は小田原となし四百噸の予定なるも、三菱倉庫を手当たり次第に積み込み、鎌倉に半額の船揚げも其の数量判明せず、鎌倉に陸揚げして又、再度当地に陸揚げしたれば、当地は四百噸より以上となりしなる可きも、船積み数量も最初より判明せず、船員も陸揚げを急ぎたれば、書類と符合せず、尤もの次第なれば、米は正当の施米なる可きも、運搬は無料なるも、浮舟の費用も有りたれば、救済の他に使用せずとの町長の言質の元に当町に分与の米は、町役場に於いて便宜上町民に廉売せりと。

廿四日 晴

震災に建て直したる墓標また十五日に倒れ、人夫を連れ大蓮寺に至り復旧の指図し出勤すれば、尾崎亮司来たりかねがね旧年奔走せし福住翁御贈位、今回の御慶事に発表なる可しと、県庁の者より内報の書状持参す。是は昨年御慶事に有功者に御贈位の御沙汰有る可しと聞き込み、拙者等報徳社中を代表し上申方を県庁

其の他に運動せし為なり。早速、湯本に電話せしも故障にて通せず、次選報告の意にて翁の墓参りの希望有りたれば幸いなりと自動車にて福住に行く。墓参すれば何処も同じく早雲寺も墓所も破潰す。帰途、辻村伊助氏全家埋没し跡を弔い黙礼して去り、入生田に田辺勉吉氏の病氣を見舞い自動車にて三時過ぎに帰宅。

途中にて 道そひの山ふところにあた、かく、また珍しき梅も咲きたり

廿五日 晴

四時頃眼覚む。明日御慶事に付き奉祝の赤飯をと気付き、老妻に謀りしに暦に直すも同日は拙者の誕生にも当たればと早速同意す。大蓮寺、五具足註、華瓶、燭台各一對と香炉一箇計五箇の件にて来談十時に出勤御慶事の賀表を宮内省に郵送す。

廿六日 曇

国旗と奉祝の丸提灯を出

し、町役場、学校よりも拝賀の通知なれば、単独に拝賀の意にて松原神社に参詣せんとて、

生ひ出し六十五つ度の廻りきぬ 神詣して 今日を祝わむ

途中仮学校の曲がり角に拝賀式場の建て札有りしも、予定の通り松原神社に至り御慶事の祝詞と誕生の祝いを兼ねて参拝す。

帰途御用邸正門前に皇太子殿下御成婚祝袴場 建家の建て札あり。市中は国旗を掲げたる家多きも、別に何の催もなく、九時過ぎ江ノ嶋・渡辺氏結納に間宮氏来たり同行、早川真福寺に至り馳走となり三時帰宅。五時、亮司来たり小豆飯にて誕生を祝う。細君、下女と関の湯に行

廿七日 半晴

昨夜より雨は夜半より雪となり、今朝見るも皆白く、

よそへても見むと 云にし言のはも思ひ 出さるる今朝の白雪

原歌

かきくらし雪もふり なむ桜花またさかぬ 間はよそへても見む よみ人しらず

廿八日 晴 廿九日 晴

先年来、市制施行を一部に於いて希望する者あり。遂に町会の宿題となり居りしが、又々、災後其の説再燃し、近来、近隣村落に交渉なし合併に付き具体的に其の条件を考慮する迄に及び居りと聞くも、村の町となり町の市となる決して悪しき事には非ざる可きも、

実力貧弱の市より充実の町村の方が返つてよかるべし。何を苦しみ負担を増加して市となす利あるや、是も一人の古き愚論なるや、否々決して愚論のみに非ざる可し。

三十日 晴

親一より去る二十三日、電報来る。披き見れば宮廷録事中に御歌会次選の記事有り。

三十一日

二時帰宅すれば、留守宅に平塚在の尼僧来訪、次選を新聞にて承知し、和歌の弟子に成り度し由にて来たりと、細君氣を利かし多忙なりと断れりと。短冊の揮毫を乞わる、も困るに、

まして一人前の歌人と思われ弟子入りとは大閉口。三時より江ノ嶋、渡辺伝七氏後妻結婚に国府津薦屋に招待を受け、七時帰宅。是は腰越支店長の依頼にて後妻の周旋せし故なり。

二月一日 晴

八時十分発にて、逗子に下車、徳富氏の野史亭に至り片岡文書を受け取り、又乗車し三時、親一方に着く夜に入り龍夫と夜店を散歩

花屋の前にて 室さきのさつき草花 とりどりに花屋の店は 冬としもなき

二日 雪

夜半よりの雪、夕刻迄降りつづき、終日炬燵に入り閑居。夕食後、新宿演芸館に行く。新築の開館二日目

にて、真打揃いの出演なるも相変わらずにて別の感じもなし。

三日 晴

雪後の道悪しく風寒し。

銀座鳩居堂にて薫香・筆求め小川町本郷を回り寒さに恐れ早々帰宿。午後龍夫と買物に出る。懇意の古本屋の談に、災後易書の売れ行きよしと、人々の不安も手助うなるべし。

四日 晴

早起き、中野に馬越氏に面会。慰安に氣も清々し、十一時、乗車二時帰宅。茨城の浅野と云う人より祝歌の返事に遣わす。

贈りし君が玉章手に とりて嬉しき事をまた重ねたり

東宮殿下御成婚奉祝取重歌道名跡会長宮内省御歌所参候冷泉伯爵御出題 兼題 松有佳色

右御成婚当日正哥披露をなし本朝歌道家元明跡会本院に登録永久保管す

と云う驚かした書状が来た。披見して又驚いたは、期日大正十三年一月廿五日迄、但し期日後二月末日まで受理す。驚かされて、

君が代の常磐の色は 御園生の松のみどりに 見るべかりけり

是では猶々閉口。

五日 晴 六日 晴

貯蔵庫温州売り、居払い箱無し一箱分金式円七十五銭近来の高値なり。

七日 晴

今日、親一大阪より帰途立寄ると葉書来る。

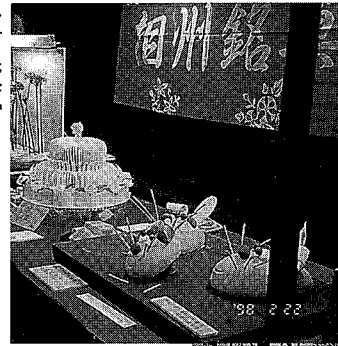
汽車のつく頃と思へば落付かず幾たび門より出てたたずむ

八時にて着く。旧井濁りたれば、新設の場所を相談し、墓参りに行く途中にて別れ出勤す。(続)



⇨青物町にて

⇨市民会館にて



第48回 小田原まつり 菓子展示会

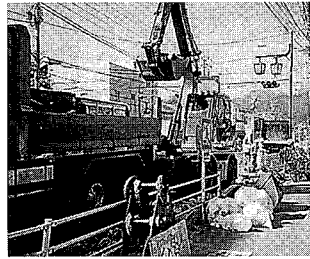
格別な味わい 菓子展示会

ご案内

- 1階 菓子の実演と販売
お菓子作り体験コーナー、お菓子作り実演、お菓子作り実演、お菓子作り実演
- 2階 おやつ(物菓子、洋菓子)販売
おしるこコーナー、アイスコーナー
- 3階 親子菓子の特別展示、菓子の歴史、菓子作り実演、お菓子作り実演、お菓子作り実演



⇨銅門にて



水道・ガス工事中

南町排水管第2工区
水町10-15号CCBOX設置
築35周年記念物産博覧会
国道1号線・新1007号線
小田原青物市場内
平成9年11月12日から
平成10年10月1日まで

(株)田中建設
TEL: 222-2211
小田原市水産局
TEL: 222-2211
小田原市建設委員会
TEL: 222-2211

⇨箱根口電柱覆設に伴う工事

第25回 楯朴会書作展

10月10日(土)11日(日) 市民会館2階展示室

第16回 陶芸展

10月10日(土)11日(日) 市民会館2階展示室

文化協会 《夏目漱石》展の巻 志賀加次郎

座談会 『21世紀の日本人の生きかた』
講師 金門谷二先生

小田原 477-7411-38

市民会館にて

**街
いろ
いろ**

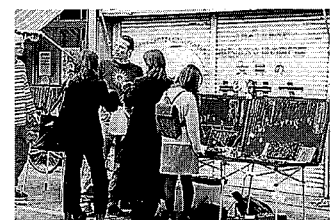


⇨志沢デパート

お知らせ

小田原青少年会館
は3月31日をもって閉館
いたしました。

長年のご愛顧ありがとうございました。
5月1日より、四月からご連絡先
小田原市建設委員会 TEL: 222-2211



⇨錦通りにて

百貨店「志沢」が閉店へ

「志沢」百貨店は、小田原市の中心街にあり、長年、市民の生活を支えてきました。しかし、時代の流れや経営状況の変化により、今年7月をもって閉店することになりました。

閉店後の跡地は、新たな商業施設や公共施設として生まれ変わります。市民の皆様には、閉店に伴うご迷惑をおかけしますが、ご理解とご協力をお願いいたします。

98.6.5

地盤沈下 地元へ波紋



閉鎖の県立小田原青少年会館

市立小田原図書館にて

冊数	冊数	冊数
1 じふごのこころ(上下)	40	
2 伊豆の国の人びと	35	
3 少年村(上下)	30	
4 女たちのハーブ	28	
5 鉄道遺蹟(全4冊)	22	
6 水の緑せ(上下)	20	
7 ルーア	20	
8 オレ	19	
9 天蓮の花	11	
10 陸奥の目(上下)	11	



◇小田原市史 通史編

原始 古代 中世
編集・発行 小田原市

A5 九六ページ
定価六千円

※有史以来、小田原合戦ま
での通史

編著 永原慶二・岩崎宗純・

佐藤博信

執筆 杉山幾一・五味文彦・

清水真澄・齋藤彦司

構成 序章 小田原の歴史

と風土

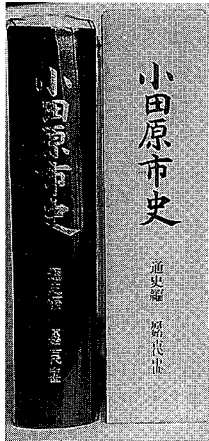
第一章 小田原のあけぼの

第二章 律令下の小田原地

方 第三章 荘園と武士

第四章 大森氏の時代

第五章 中世の村・城・館



第六章 石像物

第七章 彫刻と絵画

第八章 小田原北条氏の時

代

第九章 戦国都市小田原

第十章 小田原における宗

教諸宗派の動向
第十章 戦国時代の小田原

文化

第十三章 土器・陶磁器の流

通と消費

第十三章 小田原北条氏支配

の終焉

◇大正小田原万華鏡



著者 高田掬泉

(本名 喜久三)

発行所 秦野市・夢工房

B6 一八六ページ

価 千五百円(税別)

著者は、元小田原史談会会

長。『神静民報』に連載した

ものを補筆して、一冊の本

とした。著者は、明治末の

生まれ、大正

は、明治、昭

和の時代に挟

まれた僅か十

五年間の歳月

であるが後

年、大正デモクラシーと名

付けられる程に特徴がある

時代に青春期を過ごした著

者は、この大正時代に焦点

を絞り、小田原のまちの変

遷や風土、人間模様を、万

華鏡のように色鮮やかに巧
みに構成している。また、
それぞれに配した俳画は、
洗練された文を更に引き立
たせて潤いを与えている。

◇木声花詩

著者 飯田 和

発行所

子どもと生活文化協会

小田原市城山一六三

Sビル2F

体裁 菊

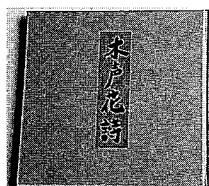
判変形

二六二ジ

価 千五

百円(税

込み)



◇おだわら 歴史と文化

第十一号 '98.3.

A5 一〇六ページ

定価 千五百円

編集・発行 小田原市役所

市史編さん室

小田原市城山四二二

☎0455-331-850

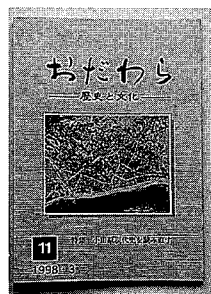
特集 小田原現代史を読み

直す

△座談会▽

・現代史の中の小田原

△研究報告▽



戦後地方文化を検証する

ために―福沢教育プラン

への道 金原左門

小田原から見た戦後「報

徳」の出发点

戦後直後の小田原の文化

青年運動―こゆるぎ座・

青民研・理想協会

井上嘉夫

小田原・ロシア正教事始

大田俊郎

透谷祭のことども

川添 猛

△書評▽

・『小田原市史』資料編

「現代」 高野和基

△調査報告▽

・小田原文化圏に属する近

世伊豆地方の文芸展望

谷口得二

・市史編纂のための地名調

査について 藤井豊久

△市史史料展寸評▽

「千年物語」 寸評

飯盛富夫

◇開成町史研究

編集 開成町文化財保護委

開成町史研究

Table with 2 columns: 頁数, 発行年. Lists contents of '開成町史研究'.

発行 開成町教育委員会

開成町延沢七七三〇

〒455-2153(代)

・足柄の報徳群像4

西大井村の下沢為八郎

(付録―北海道開拓と小

川万吉) 高田 稔

・神奈川県西部地震への関

心と対応3―嘉永地震の

被害を総括する―

諸星 光

・埋もれていた町域内の村

の皇国地誌成立までの経

緯 瀬戸崎雄

・皇国地誌(開成町旧村の)

私のゲンジボタル飼育法

井上義光

・開成町史研究のバックナ

ンバー『皇国地誌』は、

『開成町史』資料編に収

録される筈のところ、開

成町の旧十二カ村の浄書

本が発見されたときは、

資料編の刊行が終了して

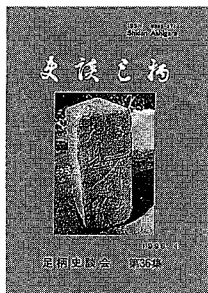
いたときで、そのため今

回の『開成町史』に掲げ

られることになった。掲

載に旧村々は次の通り。

岡野村、金井島村、延沢村、圓通寺村、中ノ名村、宮ノ臺村、牛島村、吉田島村。



◇史談足柄

'98.4. 第36集

編集発行 足柄史談会

B5 一〇九ページ

発行責任者 会長市川鉦雄
〒250-0101南足柄市斑目五三

◎四〇五(4)〇〇〇

・研究記録

・信仰の道 道標調査②

・調査研究部

・矢倉沢通見取図に見る羊

腸坂道 小沢勇一

・岩原古城想像図と岩原郷

略記等について

岩本宜明

・史跡探訪 塚原地区史跡

を尋ねて 渡辺治美

・甲斐路 碑林公園を尋ね

て 関田昇

・岡本地区の足柄桃

瀬戸清治

・相模国足柄上郡竹松村村

誌考

市川鉦雄

・日本人と仏教発展の推移

小見山満

・地蔵堂地区 山村の長閑

な暮らし その2

中戸川三郎

・山の祀りと初山行事

高木吉蔵



足柄原歴史同好会

◇安思我良

第2号
10年4月

編集 南足柄歴史同好会

編集委員会

発行 南足柄歴史同好会

代表者 同好会会長

内田 清

〒250-0132南足柄市弘西寺〇六

◎四〇五(4)〇五五

A4 26ページ

・大口文命堤を巡る十の謎

内田 清

・雨坪村 七兵衛の湯治

杉田美代子

・大雄山参道の碑と二十八

宿 小沢勇一

・小田原ちようちん 今昔

高橋佐年

理事に加わった。

伏見 弘
野口 愛子

また、史跡巡り、講演等を企画する新設の研修委員会のメンバーは次の通り。

委員長 山口 一夫

委員 吉池 清

向山 重忠

剣持 芳枝

勝俣淳一郎

次いで、十三時十分より

小野雄司氏による「幕末の日・仏交流と横須製鉄所」

の講演が行われた。

会 長 岡部 忠夫

副会長 山口 一夫

他の役員は、そのまま留

任のほか新たに次の二名が

りである。

平成九年度事業報告

◇4月19日(土) 総会、講演「箱根関所の鉄砲改めと稲葉藩」

講師 元・箱根町郷土資料館長 加藤 俊之氏

◇5月28日(水)

曾我傘焼き祭り(役員出席)

◇7月11日(金)

北条氏政、氏照墓前祭(役員出席)

◇9月10日(水) 史跡巡り国府津方面(参加者66名)

講師 石綿 勉氏

◇9月26日(金) 久野古墳慰

霊祭

◇10月25日(土) 史跡巡り

早川方面(参加者64名)

講師 青木 良一氏

◇11月20日(木) 史跡巡り南足柄方面(参加者49名)

講師 内田 清氏

◇1月25日(日) 初詣

内房方面(参加者97名)

アクアライン海ほたる

木更津・証誠寺

音

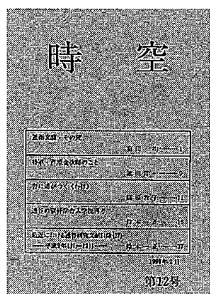
音

久里浜・ペリー上陸記念碑

◇2月1日(日)

元会長 相澤榮一氏お別れの会(役員出席)

◇3月24日(金)



◇時空

第十二号
'98.2.

発行所 時空の会

〒234-0801横浜市港南区日野

六二一―一九一40鈴木一正方

発行人 鈴木一正

A5 43ページ 五百円

〒百二十円

【評論】近衛文麿・その死

菊田均

【エッセイ】将軍・芦原金

次郎のこと 池田洋一

【エッセイ】書に道がつく

篠原敦子

【評論】透谷の蒙軒舎人学

説再考 鈴木一正

【書誌】最近における透谷

研究文献目録(17)

平成九年一月〜十二月

鈴木一正の「透谷の蒙軒学

舎人学説再考」は興味深い。

勝本清一郎が、透谷の蒙軒

入学説をとなえてから透谷

研究家はおしなべて「右へ

ならへ」になったという。

平成10年度収支予算 (一般会計)
収入の部

項目	予算額 (円)
前年度繰越金	370,474
会費	1,200,000
預り金	27,000
雑収入	526
合計	1,598,000

平成9年度収支決算書 (一般会計)
収入の部

項目	(円)
前年度繰越金	298,292
会費	1,341,000
預り金	27,000
雑収入	477
合計	1,666,769

支出の部

項目	予算額 (円)
総会費	30,000
会議費	90,000
会員連絡費	120,000
交際費	100,000
事務消耗品	10,000
振込手数料	10,000
名簿印刷費	50,000
名宛ラベル	50,000
研修費	80,000
講演会費	40,000
編集委員会費	750,000
積立金	100,000
予備費	168,000
合計	1,598,000

支出の部

項目	予算額 (円)
総会費	26,565
会議費	72,406
会員連絡費	111,027
交際費	66,650
事務消耗品	7,477
振込手数料	5,030
名簿印刷費	50,000
名宛ラベル	35,000
調査費	25,140
講演会費	20,000
会報印刷費	750,000
積立金	100,000
予備費	0
座談会費	0
預り金	27,000
次年度繰越金	370,474
合計	1,666,769

積立金

定期預金 (さがみ信用金庫)	
110,240円	満期10~3~27
419,710円	10~4~9
683,950円	10~4~9
定額貯金 (本町郵便局)	
20,000円	

預り金

兵庫県高砂市 沼田 晃様	6,000円
山北町 藤井良晃様	6,000円
山口県油谷町 磯部正人様	9,000円
小田原市早川 鈴木貫介様	6,000円
合計	27,000円

平成10年度編集委員会特別会計予算書

区分	収入額(円)	支出額(円)
前年度より繰越	1,270	
本会計より繰入	750,000	
賛助会費	810,000	
会報印刷費		1,386,000
会報発送費		100,000
編集費		50,000
取材費		18,000
事務費		7,270
合計	1,561,270	1,561,270

平成9年度史跡めぐり収支決算書

月日	区分	人員	収入額(円)	支出額(円)
	前年度より繰越金		384,555	
9.10	国府津方面	66名	0	35,830
10.25	早川方面	64名	0	28,950
11.20	南足柄方面	49名	242,000	232,500
1.25	初詣 内房方面			
	木更津高蔵寺	97名	727,500	709,350
	鋸山 日本寺			
	銀行利息		297	
	次年度へ繰越金			347,722
合計			1,354,352	1,354,352

理事会

4/19、7/8、10/28、

四回発行

◇『小田原史談』
No.170 (7月)、No.171 (10月)
No.172 (1月)、No.173 (3月)

河合浩太郎氏告別式(役員出席)

1/28、3/14 5回開催
平成10年度事業計画

◇史跡巡り 6月 酒匂方面

7月 山北方面(河村城等)

10月 秩父方面 1泊

1月 初詣 柴又帝釈天(秩父神社、三峰神社等)

方面

◇講演会開催 総会時を合

◇懇談会開催

◇『小田原史談』 4回発行

◇『小田原史談』 編集編 第三集5月発行

◇会員名簿発行

◇理事会 必要に応じ臨時開催

監査報告

平成10年四月五日、会計監査 高橋佐年
計より提出された現金出納帳、銀行預金通帳、現金、各領収書、定期預金

証書を調べましたところ
此の決算書は正確で有ると認めました。

会計監査 高橋佐年
杉山竹二

平成9年度編集委員会特別会計収支報告書

特別賛助会員

智恵袋 相田酒造店
 小田原銀座 アオキ画廊
 熱海 アオキクリニック
 足柄香粧株式会社
 飛多魚屋
 紳士服のアメリカヤ
 (株) アルファ
石川漆器(株)
 税理士 石原和夫事務所
 伊勢治書店
 伊豆箱根トラベル 小田原
 画材 ガクブチ **のうえ**
 かまぼこ
 株式会社 小田原魚市場
 小田原ガス
 小田原市農業協同組合
 小田原報徳自動車
 整髪 オートセンター・スギヤマ
 (共) 小田原中央青果 株式会社
 オリオン座
 かまぼこ 籠 清
 令 学 苑
 鐘紡株式会社小田原工場
 カネボウ化粧品鶴宮工場
 神尾食品工業 整髪
 木地挽 日下部産業 整髪
 かみやま小児科クリニック
 興電社 屋
 小伊勢津館
 国府津館
 (有) 小松石材店
 さがみ信用金庫
 趣味のごく さくらい

正 栄 堂
 杉山水道工業 整
 小田原 **のうえ**
 匠寿堂スポーツ
 大営不動産
 和菓子 小田原城趾前田毎
 刺烹 煮る 海
 二宮
 茶半家具株式会社
 ちゃん望ろ本店
 土谷建設株式会社
 角田ガクフ子店
 東京電力(株)小田原営業所
 株式会社 東 華 軒
 トーホー建物 整
 鳥 か つ 樓
 和菓子 菜 の 花 店
 八小堂書 店
 八 子 マ サ 店
 平井書 店
 富士写真フィルム整小田原工場
 株式会社 報 徳
 建築金物 (株) 星崎仲吉商店
 家庭金物 松 坂 屋
 学生専科 (丸) マルク
 諸星運輸グループ
 株式会社 美濃屋吉兵衛商店
 みみづく幼稚園
 やオマサ株式会社
 山口菓子 舖
 株式会社 ユアサコーポレーション 小田原製作所
 防災器具 優 光 社

区 分	収入額(円)	支出額(円)
前年度より繰越	6,623	
本会計より繰入	750,000	
賛助会費	810,000	
寄付金	100,000	
預金利息	215	
会報印刷費		1,470,000
会報送費		106,145
編集費		56,870
取材費		23,456
事務費		9,097
次年度繰越金		1,270
合 計	1,666,838	1,666,838

【収入内訳】
 (賛助会費)
 (一〇一) 一万
 (二〇一) 一万
 (三〇一) 一万
 円(三〇一) 鐘
 紡(小田原工
 場、富士写真
 フィルム(株)小
 田原工場、ヤ
 オマサ(株)三法
 人、〇〇〇円
 (二〇一) 足柄
 香粧(株)、〇か
 まぼこ、小田
 原
 日下部庄一氏 二〇,〇〇〇円
 テング(株) 五、〇〇〇円
 (寄付金) タジマコンサル
 計六四法人 八〇,〇〇〇円
 「一〇一」五法人 五〇,〇〇〇円
 十一法人 三〇,〇〇〇円
 田原製作所。
 原魚市場、小田原瓦斯(株)、
 JA小田原、小田原中央青
 果(株)、(株)籠清、カネボウ化
 粧品鶴宮工場、さがみ信用
 金庫、みみづく幼稚園、(株)
 ユアサコーポレーション小
 田原製作所。

【支出内訳】
 磯部正人氏 二〇,〇〇〇円
 難波常子氏 一〇,〇〇〇円
 計 一〇,〇〇〇円
 会報印刷費 No170、No173
 計一四ページ
 会報送費 会員の他、地
 域の小・中・高校、各文化
 機関への郵送料・封筒代等
 編集費 執筆者、編集者等
 の連絡費用、お礼、編集打
 合わせ費用、コピー代等
 取材費 フィルム代、DP
 E代、写真複写代等
 事務費 文房具代等
 お陰様をもちまして、充
 実した内容の編集が出来、
 非常に好評をいただきと共
 に高い評価を受けております。
 『小田原史談』は、地域の
 文化の一つの顔であるとい
 う意識込みで、編集委員一
 同努力しておりますので、
 今後ともよろしくご支援、
 ご鞭撻くださるようお願いい
 申しあげます。

1998年(平成10年)7月

年会費 普通会員三千円